

甲斐市文化財調査報告書 第31集  
( 山 梨 県 )

# 松 ノ 尾 遺 跡 17

民 間 宅 地 造 成 工 事 に 伴 う  
縄文・弥生・古墳・奈良時代の発掘調査報告書

2020

甲斐市教育委員会  
株式会社クローバー



甲斐市文化財調査報告書 第31集  
( 山 梨 県 )

# 松 ノ 尾 遺 跡 17

民 間 宅 地 造 成 工 事 に 伴 う  
縄文・弥生・古墳・奈良時代の発掘調査報告書

2020

甲斐市教育委員会  
株式会社クローバー



## 序 文

甲斐市の東部は、金峰山に源を持つ荒川によって造られた扇状地形となっており、この扇状地上には縄文時代から連綿と人々の生活が営まれていたことが近年の発掘調査によって明らかとなっています。この中には弥生時代の集落遺跡として山梨県最大規模を誇る金の尾遺跡や古墳時代前期の管玉、丸玉装飾品の未完成品が出土し、玉作り遺跡の可能性が高くなった御岳田遺跡、末法遺跡など重要な遺跡が点在していることから、山梨県の歴史を学習する上でも注目される地域となっています。

今回報告します松ノ尾遺跡は過去の調査で金銅製阿弥陀如来の小型仏像や螺髪、円面鏡、帶金具など古代の政治や仏教色が強い遺物が多く出土し、更に近年は古墳時代初頭の周溝墓や大型の赤彩壺が発見されるなど歴史的に早い段階から開発が進んでいた地域であることが分かってきています。

本書はこの松ノ尾遺跡の第17次調査報告書であり、新たな資料を提示することができました。

近年この地域では頻繁に開発が行われるようになり埋蔵文化財の保護が急務となってきております。今後は調査で得られました成果を後世に伝えていくとともに、学校教育や歴史研究、生涯学習の資として多くの方々に幅広く活用していただければ幸いです。

結びに地権者をはじめ、関係者各位のご理解、ご協力に感謝を申し上げ序といたします。

令和2年3月

甲斐市教育委員会  
教育長 三澤 宏



## 例　　言

1. 本書は、山梨県甲斐市大下条125番地1、126番地1に所在する松ノ尾遺跡第17次発掘調査報告書である。
2. 本書は、株式会社クローバーによる宅地分譲開発事業に伴い実施された。調査面積は120m<sup>2</sup>である。調査費は株式会社クローバーが負担した。
3. 発掘調査及び整理分析調査期間  

試掘調査	平成30年9月26日～平成30年10月5日
本掘調査	平成30年11月8日～平成30年12月25日
整理分析調査	令和元年5月1日～令和2年3月13日
4. 調査組織は次のとおりである。  

調査主体者	甲斐市教育委員会
調査担当者	〔試掘〕長谷川哲也（甲斐市教育委員会教育部生涯学習文化課文化財係主任） 〔本掘〕大島正之（甲斐市教育委員会教育部生涯学習文化課文化財係長・主幹）
調査事務局	甲斐市教育委員会教育部生涯学習文化課文化財係
発掘・整理分析	青柳正史、秋山高之助、飯沼源治、伊井 實、笠井 治、小林 求
調査協力員	斎藤功記、醍醐三郎、瀧口晴彦、高添美智子、立花重光、田中ひとみ 手塚松雄、羽中田 熊、日向充雄、古屋秀雄、森沢篤美、望月厚子 望月典子、箭本千尋
5. 本書の執筆・編集は大島が担当した。
6. 本書掲載の写真の撮影は大島が行った。
7. 本報告の遺構、遺物の時期は「山梨県史 資料編2 原始・古代2 考古（遺構・遺物）」に準拠する。
8. BM設置、遺構平面測量、作図、遺物出土地点測量は疾測量株式会社に委託し、笹崎恵里佳、横森麻依が担当した。
9. 整理分析調査における遺物実測、拓本、トレース、図版作成は大島の指示のもと高添美智子、田中ひとみ、望月厚子、望月典子が担当した。
10. 発掘調査における表土剥ぎ、埋め戻しは三枝興業 代表 三枝哲雄が行った。
11. 報告書作成にあたり、次の方々よりご教示をいただいた。ご芳名を記して感謝申し上げる。  
坂本美夫（甲斐市文化財保護審議会長）、新津 健（甲斐市文化財保護審議会委員）  
櫛原功一（帝京大学文化財研究所講師）
12. 松ノ尾遺跡第17次発掘調査において得られたすべての資料は一括して甲斐市教育委員会に保管してある。

## 凡 例

1. 座標は世界測地系に準拠した。
  2. 遺構堆積土及び土器の色調は、農林水産省農林技術会議事務局監修『新版 標準土色帳』に準拠している。
  3. 各挿図中のスクリーントーンの内容は次のとおりである。  
土器断面  は須恵器  
土器内面  は黒色処理、土器内外面  は赤彩、 は擦り面
  4. 各挿図の縮尺は次のとおりである。
    - 1) 遺構挿図 堅穴建物跡 1/40 但し 1号堅穴建物跡は 1/50、カマド 1/20  
土坑・土壙墓 1/40、石囲い埋設土器炉 1/10、溝跡 1/50、ピット 1/60
    - 2) 遺物挿図 それぞれにスケールを付した。
  5. 出土遺物観察表の計測値中、( ) 内数値は推定を表し、残部の計測は数字の頭に「残」と記した。
  6. 遺構平面図中の数字と黒点は各遺構内遺物挿図番号の遺物と出土位置を表す。
  7. 遺物番号は本文、挿図、観察表で統一してある。
  8. 本書で使用した地図は、甲斐市都市計画地図である。

## 本文目次

序文

例言·凡例

目次

第1章 遺跡をとりまく環境

1. 遺跡の立地と環境	1
2. 松ノ尾遺跡とその周辺	1
第2章 遺構と遺物	
1. 基本層位	7
2. 堅穴建物跡	7
3. 土坑	15
4. 土壙墓	18
5. 石囲い埋設土器炉	18
6. ピット	19
7. 溝跡	19
8. 遺構外出土遺物	22
第3章 まとめ	
	25

## 挿 図 目 次

第1図	松ノ尾遺跡周辺の遺跡	3	第13図	土坑・出土遺物(1)	16
第2図	周辺地形図	4	第14図	土坑・出土遺物(2)	17
第3図	調査区位置図	5	第15図	1号土壙墓・石囲い埋設土器炉	18
第4図	調査区全体図	6	第16図	埋鉢	19
第5図	1号堅穴建物跡	8	第17図	ピット	19
第6図	1号堅穴建物跡出土遺物(1)	9	第18図	1号溝跡	20
第7図	1号堅穴建物跡出土遺物(2)	10	第19図	1号溝跡出土遺物(1)	21
第8図	2号堅穴建物跡・出土遺物	11	第20図	1号溝跡出土遺物(2)	22
第9図	2号堅穴建物跡カマド	12	第21図	遺構外出土遺物(1)	22
第10図	3号・4号堅穴建物跡・出土遺物	13	第22図	遺構外出土遺物(2)	23
第11図	5号堅穴建物跡・出土遺物	14	第23図	遺構外出土遺物(3)	24
第12図	5号堅穴建物跡カマド	15			

## 表 目 次

第1表	1号堅穴建物跡出土遺物観察表	10	第6表	4号土坑出土遺物観察表	17
第2表	2号堅穴建物跡出土遺物観察表	12	第7表	5号土坑出土遺物観察表	17
第3表	3号堅穴建物跡出土遺物観察表	13	第8表	石囲い埋設炉出土遺物観察表	19
第4表	5号堅穴建物跡出土遺物観察表	15	第9表	1号溝跡出土遺物観察表	22
第5表	3号土坑出土遺物観察表	17	第10表	遺構外出土遺物観察表	24

## 写 真 図 版 目 次

写真図版 1	調査前風景	写真図版 3	1 号溝跡（東から）
	調査区表土掘削風景		1 号溝跡（南から）
	1 号竪穴建物跡		
	2 号竪穴建物跡		
	3 号竪穴建物跡	写真図版 4	1 号竪穴建物跡出土遺物
	4 号竪穴建物跡		3 号竪穴建物跡出土遺物
	5 号竪穴建物跡		3 号土坑出土遺物
	1 号土坑		4 号土坑出土遺物
			石囲い埋設炉出土遺物
写真図版 2	2 号土坑		
	3 号土坑	写真図版 5	1 号溝跡出土遺物
	4 号土坑		遺構外出土遺物
	5 号土坑		
	1 号土壙墓		
	石囲い埋設土器炉		
	石囲い埋設土器炉完掘状況		

# 第1章 遺跡をとりまく環境

## 1. 遺跡の立地と環境(第1図・第2図)

甲斐市は甲府盆地の北西部に位置し、東側が甲府市、西側が韋崎市、北側が北杜市、南側が中巨摩郡昭和町に接する。市内は地形の特徴から4つの地域に分けることができる。

まず、市内の北部は茅ヶ岳、曲岳、太刀岡山など標高千メートルを超す山々が点在する山岳地帯で、急峻な地形を呈している。市中西部は黒富士、茅ヶ岳の火山活動によって形成された台地が南北に広がり、通称「登美台地」、「赤坂台地」と呼ばれる茅ヶ岳南麓の丘陵地帯となる。市東部は奥秩父山系の金峰山を源とする荒川が流れ、この荒川によって形成された扇状地域となり、市南部は赤石山脈(南アルプス)鋸岳を源とする釜無川によって形成された扇状地域となる。

以上のように甲斐市域は北部から中西部にかけて山間地、丘陵地帯となり、東部から南部にかけて扇状地となっている。市内の標高は、最高地点が北部金ヶ岳山頂の1750m、最も低い地点が南部の玉川地域で265mを測り、標高差は実に1400mを超える。このように標高の高低差が著しく、地形もバリエーションに富むことから、気象やそこから生じる自然環境も地域により大きな違いを見せる。この自然環境の違いがその地域に住む人々の生活にも大きく影響しており、生活の違いが生み出した歴史が本市の特徴でもある。

松ノ尾遺跡は上述した東部地域の扇状地上に所在している。この東部地域の扇状地には南北方向に連なる微高地が東西に平行し2本形成されているが、この微高地上を中心に遺跡包蔵地が密集している。本遺跡はこの東側にある微高地に占地し、標高は286～296mを測る。

## 2. 松ノ尾遺跡とその周辺(第1図・第3図)

松ノ尾遺跡は、平成5年度(1993)に実施した遺跡詳細分布調査によって周知の遺跡包蔵地として登録され、翌平成6年度に都市計画街路愛宕町・下条線(現 市道三味堂・村上線、通称 甲斐松ノ尾通り)建設に先立ち第1次の調査が実施されている。平成6年(1994)から平成28年(2016)までの間に計15回の本調査が実施されており、遺跡範囲は南北約700m、東西約450mの広がりをもつ広大な遺跡である。

本遺跡では、これまでに竪穴建物跡計130軒以上のか、竪穴状遺構、土坑、溝状遺構など数多くの遺構、遺物が発見されており、その時代も多岐にわたり、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることがわかっている。このうち遺跡の主体をなす時代は6世紀から7世紀にかけての古墳時代後期と10世紀から12世紀の平安時代であり、15回の調査結果から広範囲に展開していることが明らかとなってきている。

さらに平成27年(2015)の第15次調査では弥生時代後期後半の竪穴建物跡2軒、古墳時代初頭の竪穴建物跡2軒のほか、本遺跡では初見となる方形周溝墓6基が発見されている。周溝墓はすべて古墳時代初頭に位置づけられ、特に6号周溝墓の周溝からは残存高84.3cm、最大径64.6cm、口縁径36cmの複合口縁を持った静岡県東部地域の大廓型土器の系譜を持つ大廓系大型赤彩壺が出土している。

その他の出土遺物をみると、遺構の分布状況と同様に古墳時代後期の遺物が広範囲で認められる。

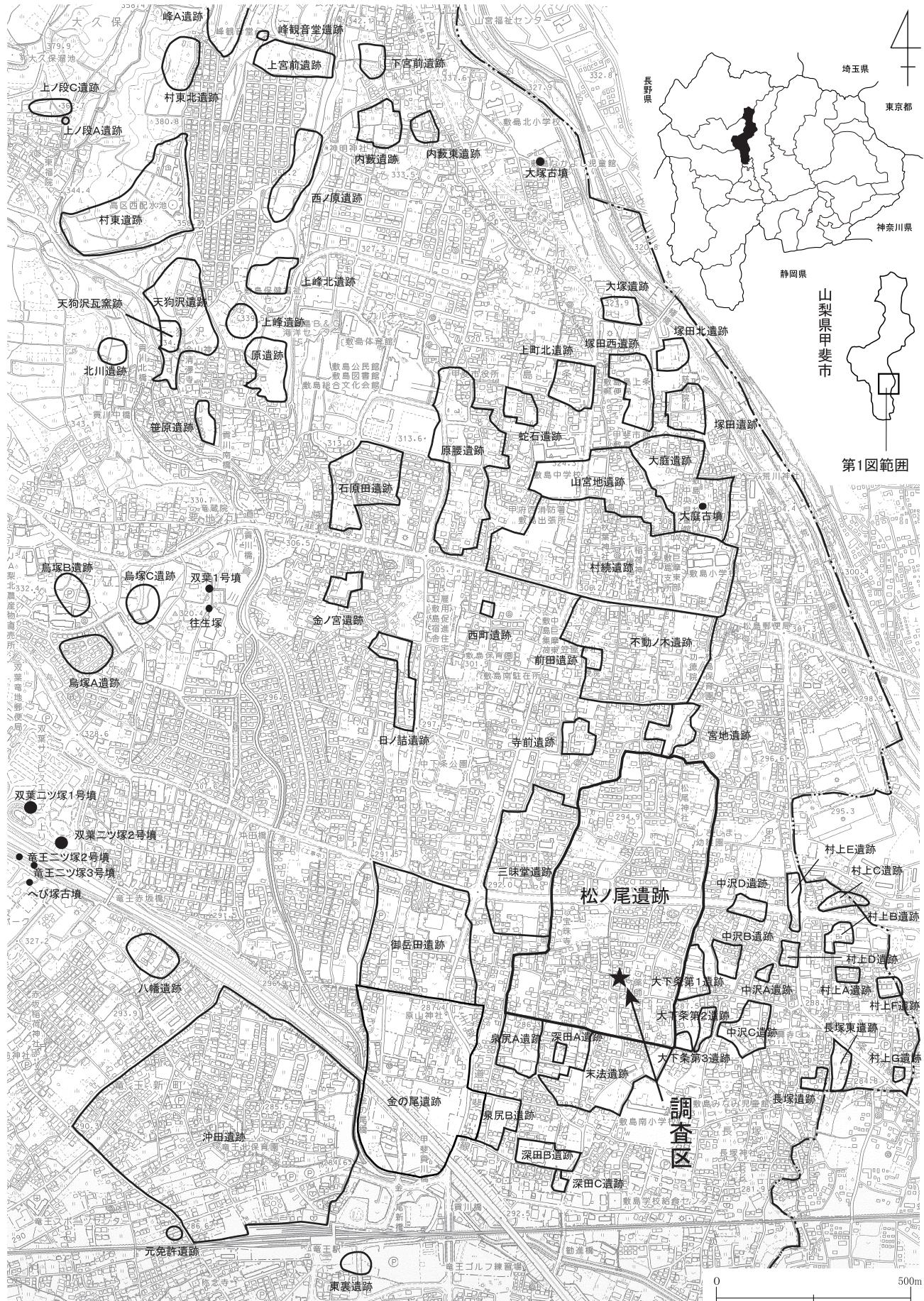
また、奈良～平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器など膨大な量の遺物が出土している。特殊遺物としては、円面硯(第1・2次)、螺髪(第7次)、緑釉陶器(塊・皿・稜塊・耳皿)、壺G(第3・6次)、貿易陶磁器の白磁や青白磁(碗・皿・水注・壺類)、青磁(碗・皿類)、布目瓦片(第10次他)などのほか、金属製品では帶金具(鉄製鉗具、銅製蛇尾具)、銅製連繫壺金具、金銅製小仏像2躯などが出土している。

松ノ尾遺跡出土の建物跡の時期をみると、6世紀末から7世紀、10世紀から12世紀初頭に一つ隆盛期を迎えてることが分かる。前者の時期は松ノ尾遺跡周辺に群集墳が築造される時代であり、この地域の開発が進んだことが窺える。後者の時期の遺物には特殊遺物の出土が多いことから周辺地域の政治的、経済的な拠点地であった可能性が高いと考えられる。

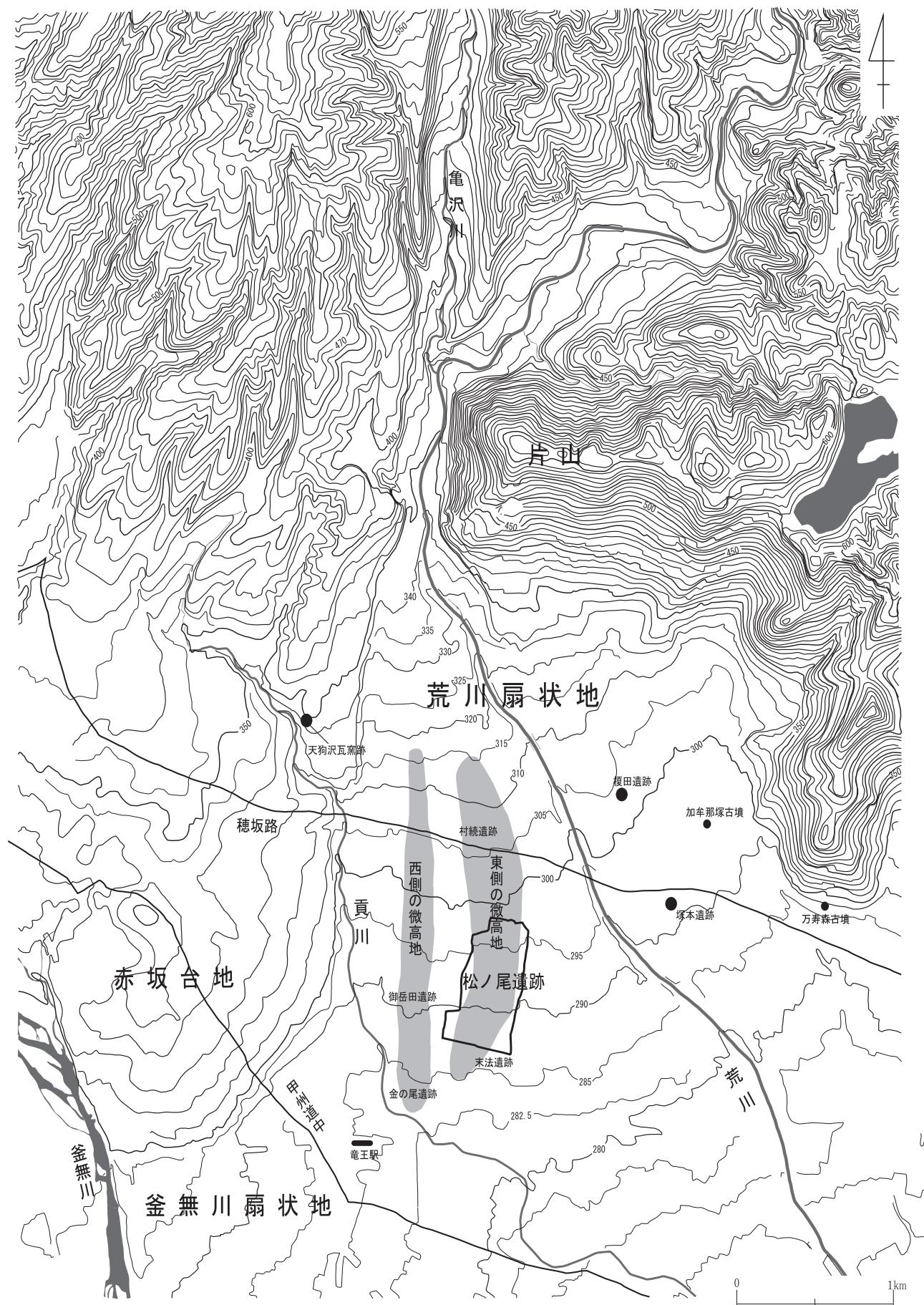
本調査区の北方約500mに延喜式内社である松尾神社が鎮座する。松尾神社は京都市西京区嵐山宮町の古社「松尾」大社から勧請し創建された神社である。松尾大社は古代末以降全国に荘園地を所有しており、この松ノ尾遺跡を中心とした甲斐市中下条以東から甲府市湯村以西地域も古代末に立荘された松尾大社領「志麻荘」域であったことが知られている。松尾神社の勧請などから本地域が荘家など荘園地の拠点地域であった可能性が高いといえよう。

## 参考文献

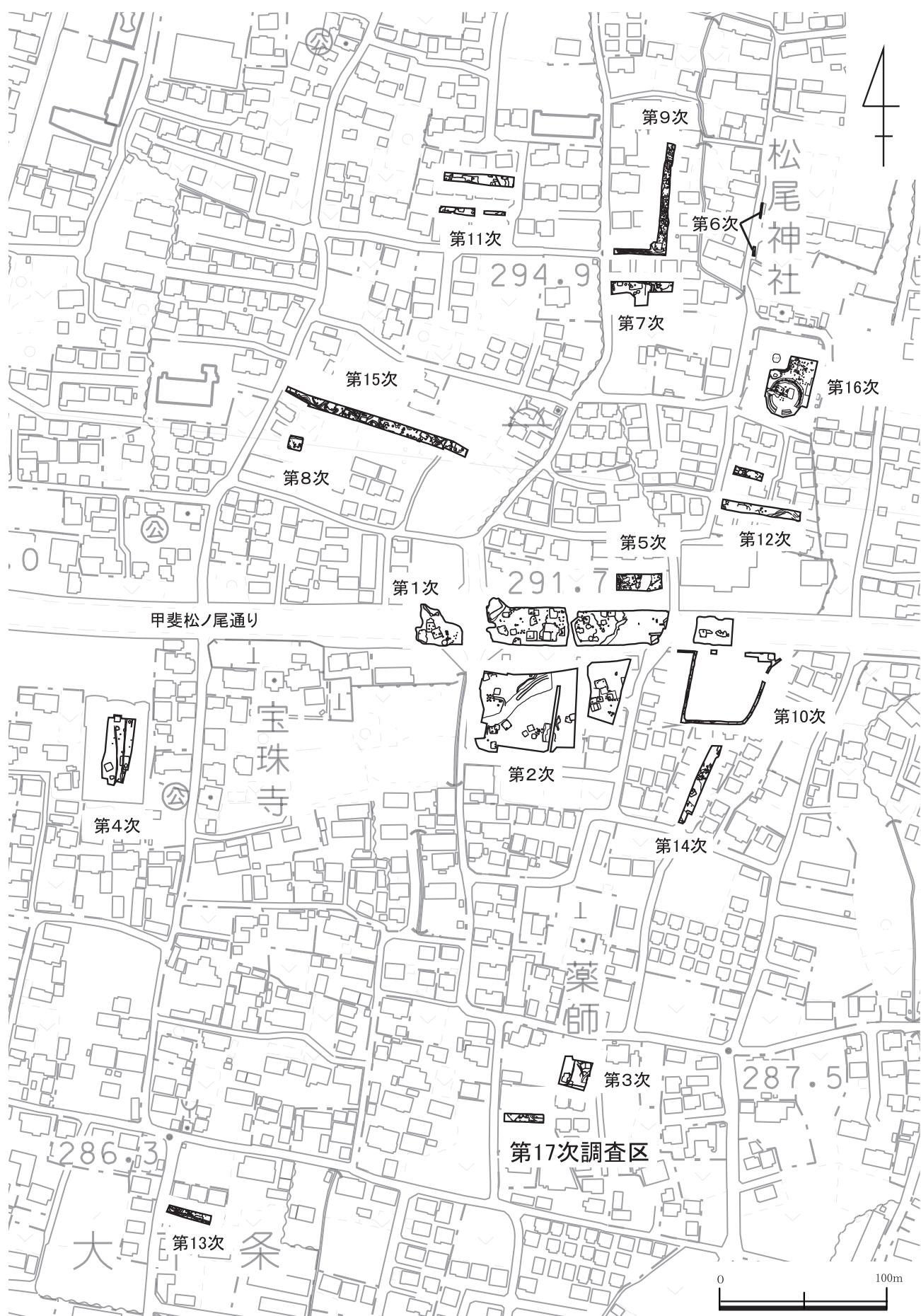
- 大島正之 1996 『松ノ尾遺跡』 敷島町教育委員会  
大島正之 1998 「松ノ尾遺跡」 『山梨県史 資料編1 原始・古代1』 山梨県  
大島正之 2013 『御岳田遺跡V』 甲斐市教育委員会  
長谷川哲也 2016 『松ノ尾遺跡15』 甲斐市教育委員会  
大島正之 2016 「松尾社領甲斐国志麻荘域における古代集落の実態」 『山梨県考古学協会誌』 第24号 山梨県考古学協会



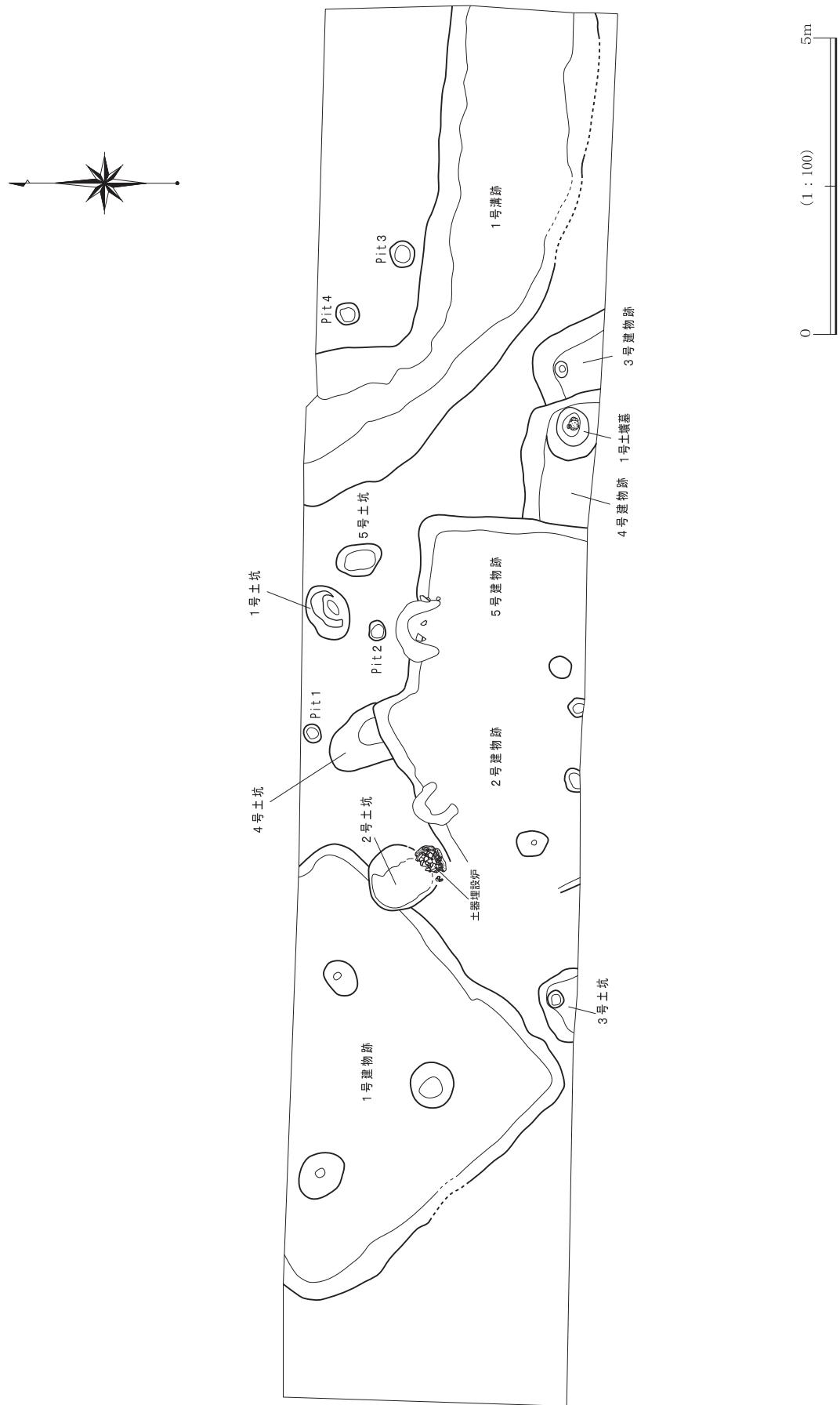
第1図 松ノ尾遺跡と周辺の遺跡



第2図 周辺地形図



第3図 調査区位置図



第4図 調査区全体図

## 第2章 遺構と遺物

### 1. 基本層位

遺跡は荒川によって形成された沖積地に立地する。松ノ尾遺跡ではシルトを多く含む茶褐色土、黒色土（腐食泥炭土、遺物包含層）の堆積が厚く認められる。

本調査区は鉄工所の跡地であったことから昭和、平成期の攪乱痕跡が非常に多く認められた。このため、調査区1層は鉄屑や針金などの廃棄物層で、その直下が遺構確認面となる。

第I層（表土層・攪乱層）はコンクリート片や鉄屑、金具類などによる堆積が著しく、また深く掘り込んで廃棄されている個所も多く確認された。堆積は50cm前後。

第II層（地山層）遺構確認面。

### 2. 壇穴建物跡

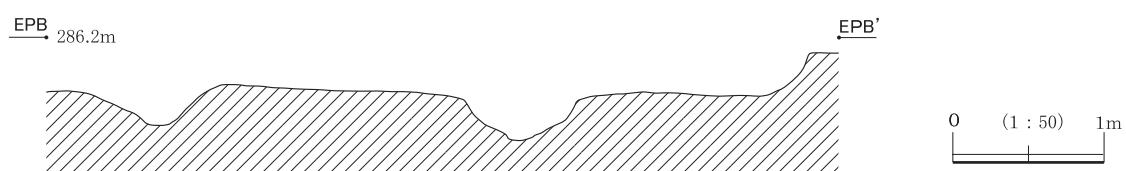
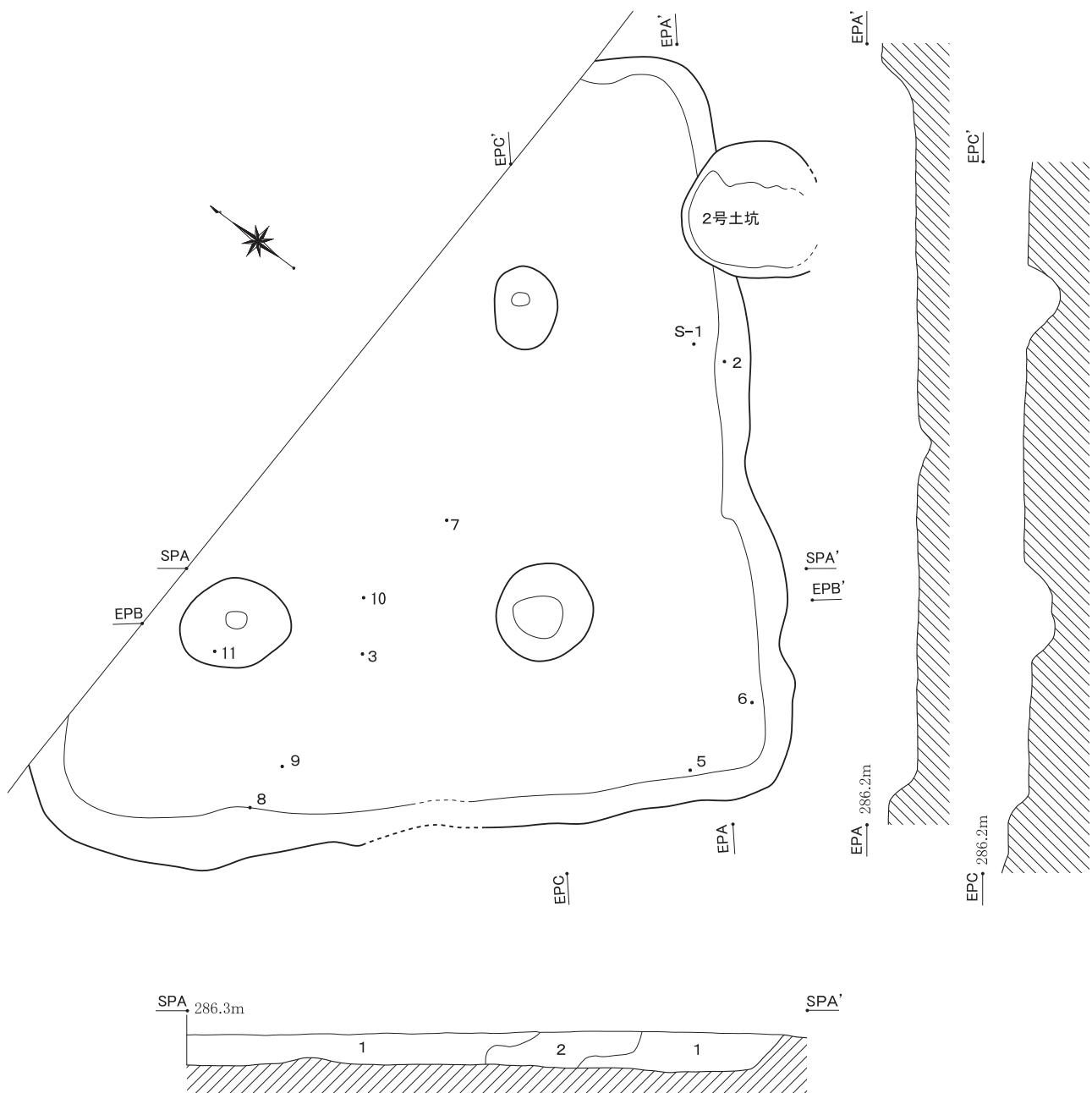
今次調査では壇穴建物跡が5軒確認された。しかし調査区域は宅地分譲地内の新設道路部分ということから調査面積が狭小で、且つ後世の攪乱や重複遺構も多かったことから全容が明確に確認できる壇穴建物跡は皆無であった。

#### 1号壇穴建物跡（第5図、第1表、写真図版1・4）

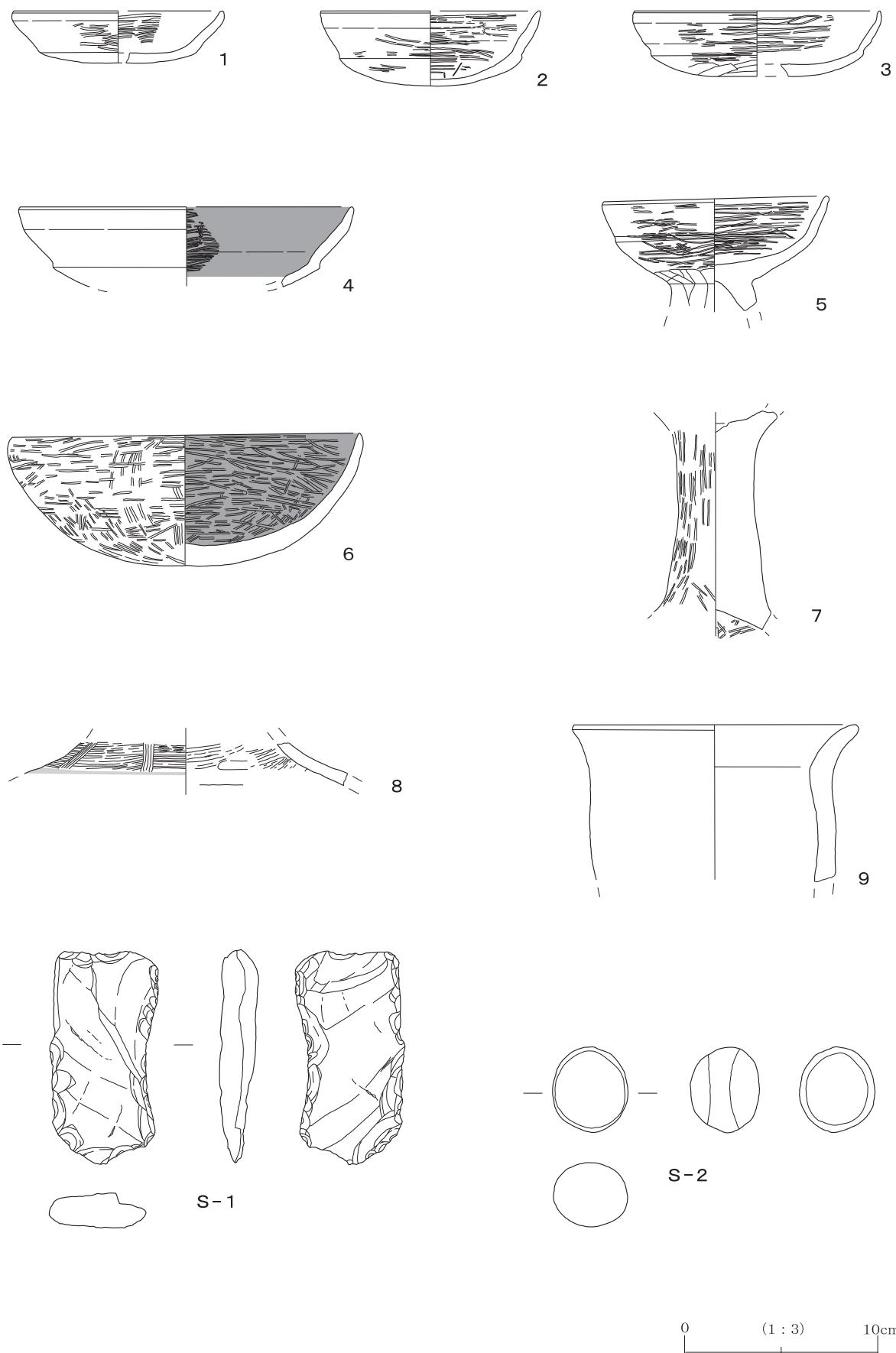
本建物跡は調査区西端に位置し、北壁から東壁は調査区外となり、南壁の一部は平安期の土坑によって切られている。規模は東西5.8m、南北5.9mを測り、平面形は方形と推定される。壁高は東壁21cm、西壁24cm、南壁27cm、北壁24cmを測り緩やかに立ち上がる。床面は全体に貼り床が施され、柱穴は3か所確認された。

柱穴径は太いもので71～87cm、細いもので49～66cm、残存深さ平均23cmである。

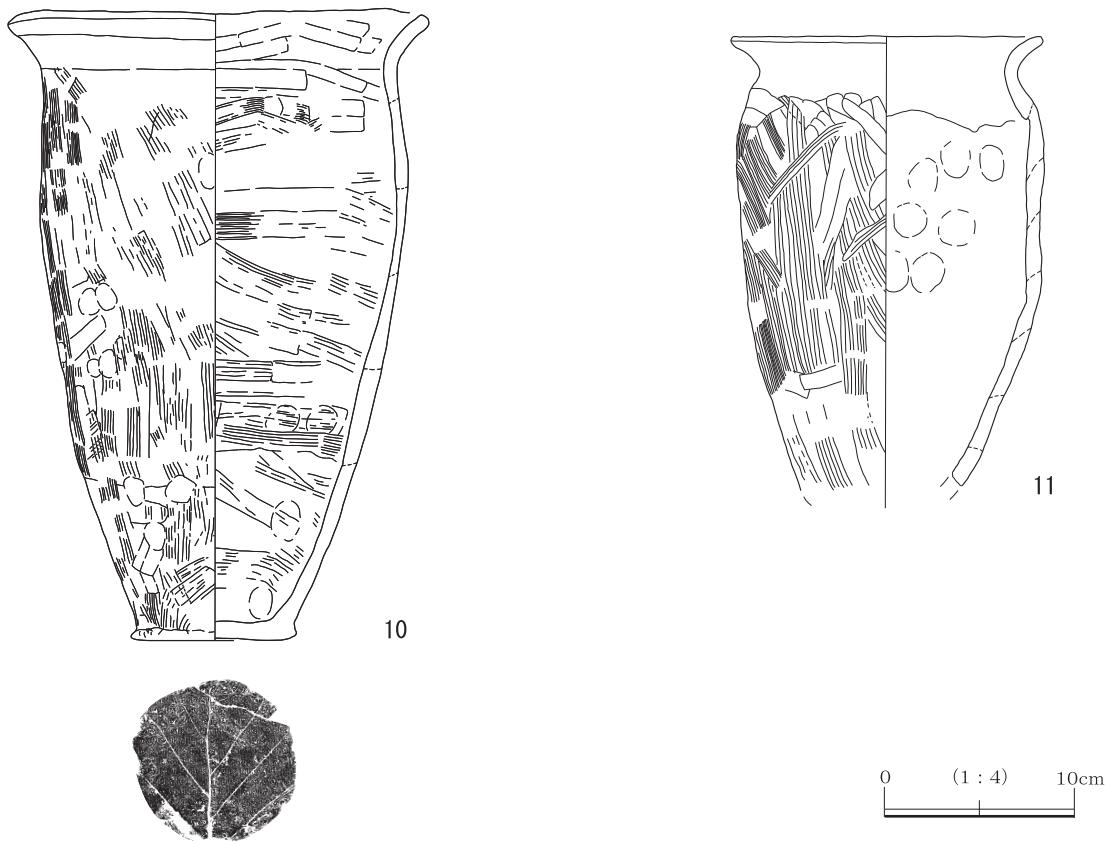
遺物は建物の南西面を中心に出土し、特に床面に近い位置で図化可能な遺物が出土している。南壁を切る2号土坑が縄文中期の埋設炉を切っていることからS-1は縄文期のものと考えられる。土器は土師器壺、甕が主体をなす。時期は6世紀第4四半期と考えられる。



第5図 1号竖穴建物跡



第6図 1号竖穴建物跡出土遺物 (1)



第7図 1号竪穴建物跡出土遺物（2）

第1表 1号竪穴建物跡出土遺物観察表

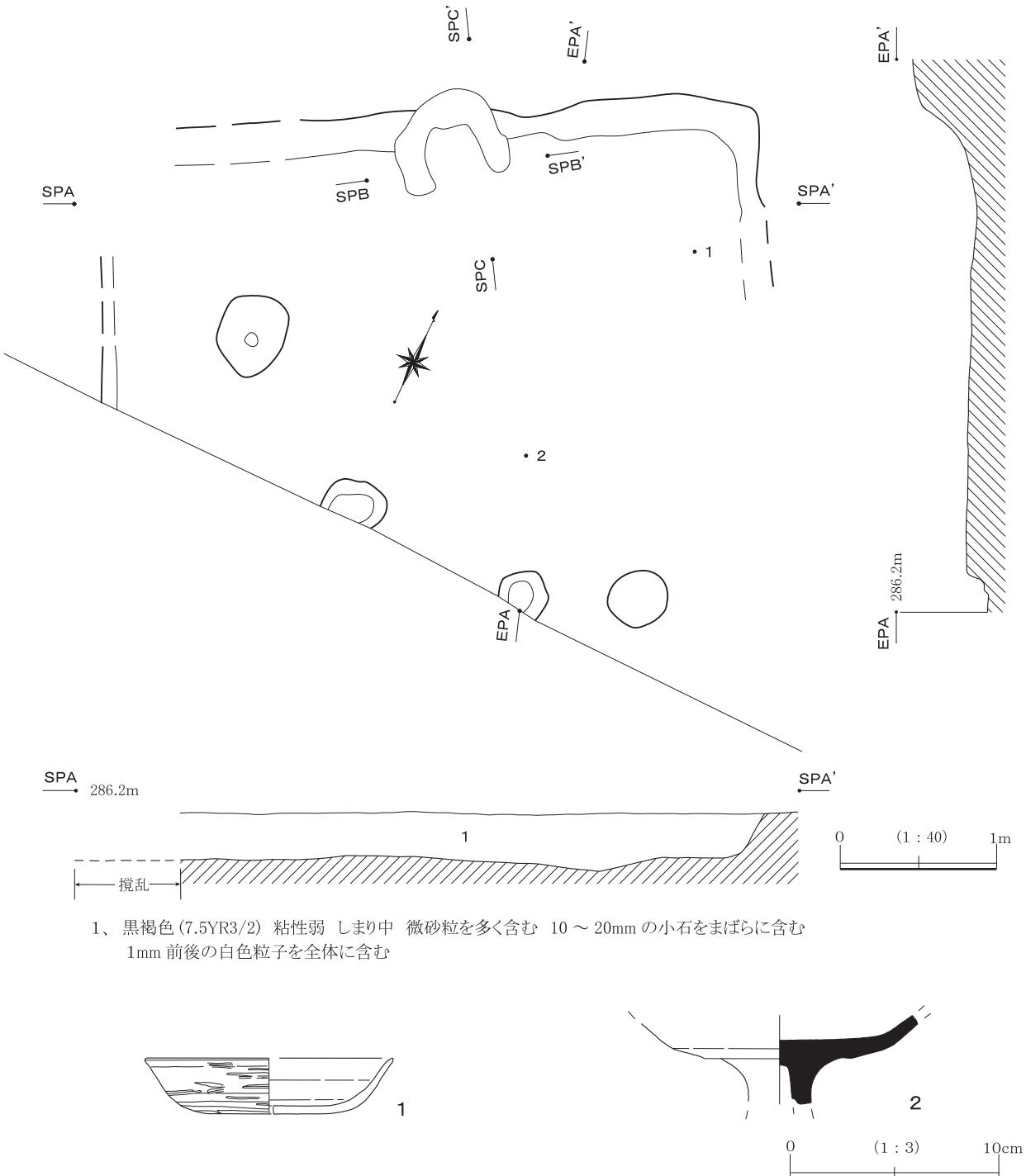
番号	注記記号	器種	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	技法・器形の特徴
1	F17-1住1層一括	土師器	壺	2.7	(10.8)	(5.8)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	キメ細かい	良好	内外面横方向ミガキ
2	F17-1住P12	土師器	壺	3.9	(11.4)	(2.0)	明赤褐 (5YR5/6)	キメ細かく緻密	良好	内面横方向のミガキ 内面底部へラ整形痕
3	F17-1住P4	土師器	壺	3.4	(12.8)	(5.0)	灰褐 (7.5YR4/2)	キメ細かく緻密 赤色粒子少量含む	良好	内外面横方向のミガキ 外面上半横方向へラ削り
4	F17-1住1層一括	土師器	壺or高壺	残4.15	(17.2)	—	外面黒褐 (7.5YR7/1) 内面黒 (10YR7/1)	キメ細かく緻密	良好	内黒土器 内外面横方向のミガキ
5	F17-1住P1	土師器	高壺	残6.0	11.6	—	にぶい褐 (7.5YR5/4)	キメ細かい 赤色粒子を含む	良好	内面横方向のミガキ 外面口辺部横方向のミガキ 外面壺部下半へラ整形
6	F17-1住P2	土師器	壺	7.0	18.2	3.0	外面にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面黒褐 (2.5Y3/1)	緻密	良好	内黒土器 内外面ミガキ
7	F17-1住P5	土師器	高壺(脚部)	残11.3	—	—	橙 (5YR6/6)	緻密 白色粒子・赤色粒子を含む	良好	外面にミガキあり 上面のワレ口に接合時のハケ痕あり
8	F17-1住床直P9 F17-1住1層	弥生土器	壺	残3.1	—	—	外面明黄褐 (10YR6/6) 内面灰黄褐 (10YR4/2)	キメやや粗い 金雲母・白色粒子・赤色粒子	良好	外面赤彩あり 外面簾状文 内面横方向櫛描文
9	F17-1住P8	土師器	甕	残8.0	14.7	—	褐 (7.5YR4/4)	キメ細かい 長石・金雲母・赤色粒子	良好	内外面口辺部横ナデ
10	F17-1住床直P7	土師器	長胴甕	33.5	22.1	8.6	にぶい褐 (7.5YR5/4)	キメ粗い 金雲母・白色粒子・赤色粒子	良好	外面体部縦方向ハケ目 内面横方向ハケ目 内外面指頭痕 底部木葉痕
11	F17-1住床直P6	土師器	長胴甕	残24.1	16.1	—	褐 (7.5YR4/4)	キメ細かい 長石・石英・雲母	良好	外面体部斜め方向ハケ目後へラ削り 外面剥離が認められる 内外面口辺部横ナデ
S-1	F17-1住S1	石製品	打製石斧	最大長 10.9	最大幅 5.4	最大厚 1.8	—	—	—	
S-2	F17-1住一括	石製品	すり石？	最大長 4.4	最大幅 3.9	最大厚 3.3	—	—	—	

## 2号竪穴建物跡（第8・9図、第2表、写真図版1）

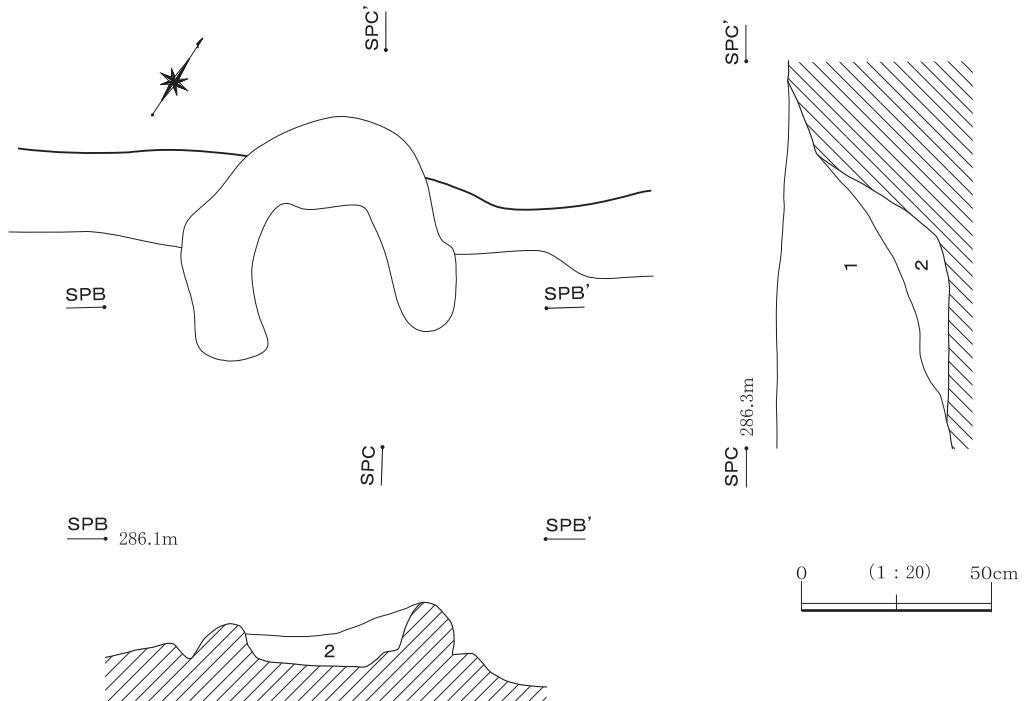
本建物跡は調査区中央に位置し、東壁は5号竪穴建物跡と重複関係にあり、南壁は調査区外、壁北西コーナーは攪乱を受けている。規模は東西4.24m、南北は確認できる範囲で3.91mを測り、平面形は方形と推定される。壁高は東壁28cm、北壁31cm、で東壁はやや角度を持って立ち上がり、北壁は緩やかに立ち上がる。床面は部分的に硬化面が確認でき貼り床となる。柱穴は4か所確認され平均径32cm、深さ13cmである。カマドは北壁中央に設けられ、袖幅70cm、奥行き62cmを測る。

攪乱を受けているせいか図化可能な遺物は少数で土師器坏片、須恵器高坏のみである。

時期は7世紀末から8世紀前半と推定される。



第8図 2号竪穴建物跡・出土遺物



1、黒褐色(7.5YR3/2) 粘性弱 しまり中 微砂粒を多く含む 10～20mm の小石をまばらに含む 1mm 前後の白色粒子を全体に含む  
 2、暗赤褐色(5YR3/2) 粘性中 しまり中 全体に焼土・炭化物を多く含む

第9図 2号竖穴建物跡カマド

第2表 2号竖穴建物跡出土遺物観察表

番号	注記記号	器種	器形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	焼成	技法・器形の特徴
1	F17-2住1層P3	土師器	皿	2.7	(12.0)	(6.0)	橙 (5YR6/6)	キメやや粗く緻密 赤色粒子・長石・石英	良好	外面体部横方向ナデ調整後ミガキを施す 底部糸切後ヘラ調整
2	F17-2住床直P1	須恵器	高杯	残4.2	—	—	褐灰 (10YR5/1)	キメ細かい 白色粒子を含む	良好	

### 3号竖穴建物跡 (第10図、第3表、写真図版1・4)

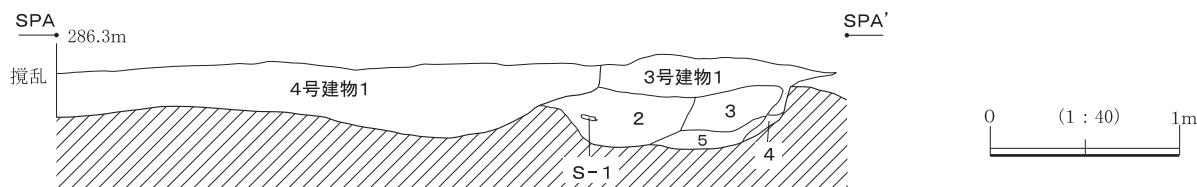
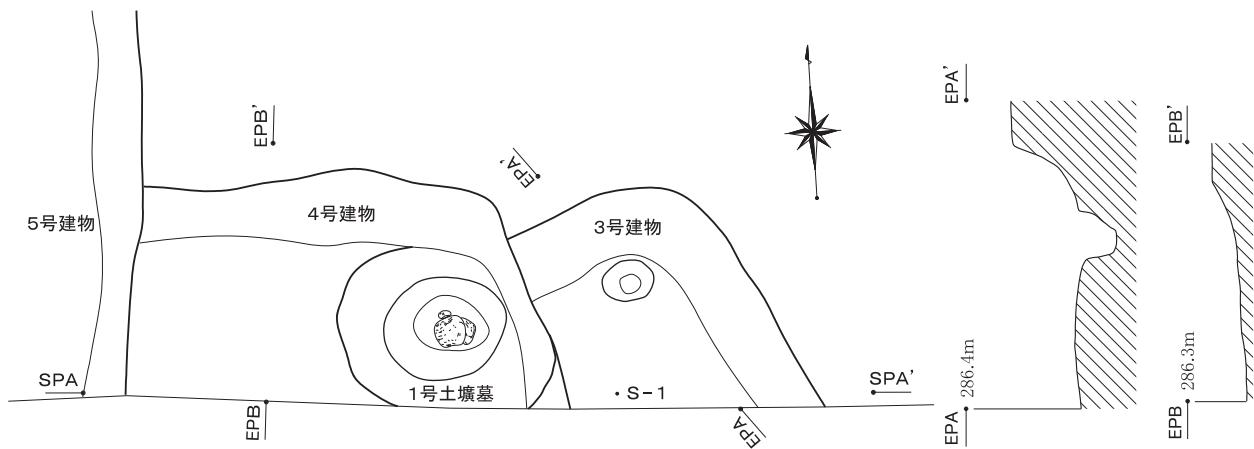
本跡は調査区中央やや東側に位置し、西側は4号竖穴建物跡に切られ、南側の殆どが調査区外となることから、確認できる規模は東西1.12m、南北1.36mである。壁高は東壁約40cm、北壁36cmで掘り込みはやや深く、角度を持って立ち上がり、床面は貼り床である。柱穴径26cm、深さ20cmを測る。

時期は土器から6世紀第4四半期と考えられる。

### 4号竖穴建物跡 (第10図、写真図版1)

本建物跡は3号竖穴建物跡の西側にあり、3号竖穴建物跡を切り、5号竖穴建物跡に切られ、1号土壙墓が掘り込まれている。規模は確認できる範囲で東西1.84m、南北1.15mを測る。壁高は東壁39cm、北壁12cmでともに緩やかに立ち上がり、床面は貼り床である。

時期は不明であるが、6世紀末から8世紀前半の間に位置づけられる。

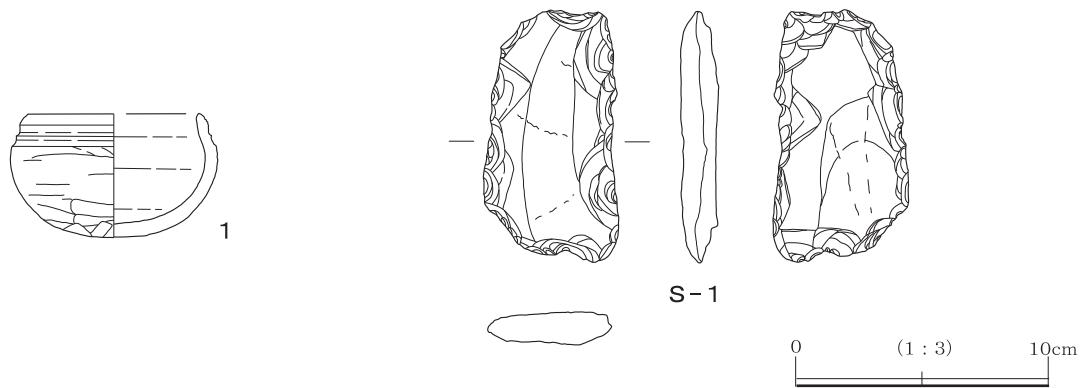


### 3号建物

- 1、黒褐色(7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 砂粒を含む 1mm前後の小石を含む 白色粒子を少量含む
- 2、暗褐色(10YR3/3) 粘性中 しまり中 微砂粒を含む 5~10mmの小石を少量含む 黄色砂粒を含む
- 3、褐色(10YR4/6) 粘性中 しまり中 微砂粒を含む 5mm前後の小石を少量含む 黄色砂粒を全体に多く含む
- 4、暗赤褐色(5YR3/2) 粘性中 しまり中
- 5、褐色(10YR4/4) 粘性中 しまり中

### 4号建物

- 1、黒褐色(10YR2/3) 粘性弱 しまり中 2mm前後の小石を含む 白色粒子を少量含む



第10図 3号・4号竪穴建物跡・出土遺物

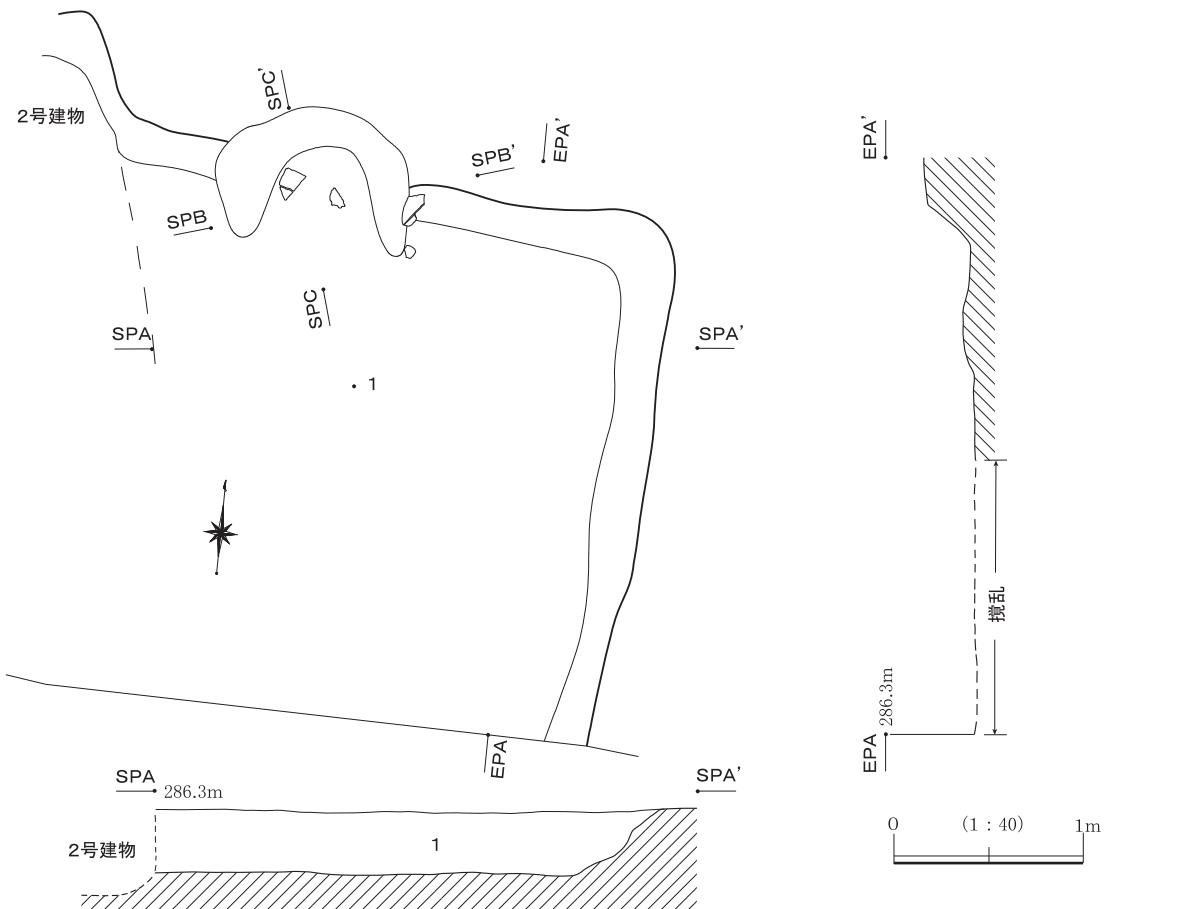
第3表 3号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	注記記号	器種	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	技法・器形の特徴
1	F17-3住1層一括 F17-1住1層一括	土師器	小型碗	4.9	(6.8)	1.4	灰黄褐 (10YR4/2)	緻密 金雲母含む	良好	内面横ナデ 外面口縁部ミガキ 外面口辺部横ナデ 外面体部底部削り
S-1	F17-3住2層S1	石製品	打製石斧	最大長 10.0	最大幅 5.3	最大厚 1.5	—	—	—	

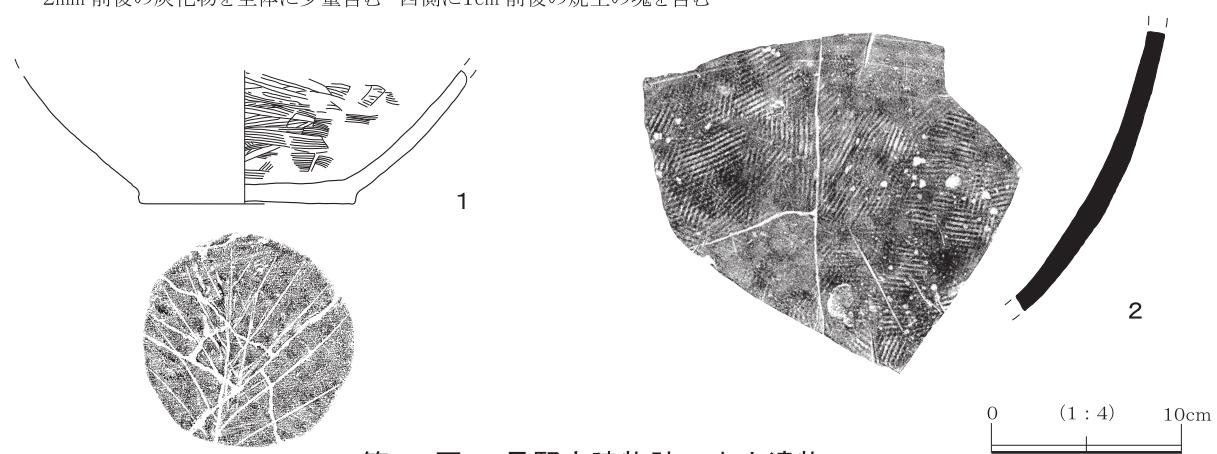
### 5号竪穴建物跡（第11・12図、第4表、写真図版1）

本跡は調査区中央に位置し、2号、4号竪穴建物跡と重複関係にあり、南壁は調査区外となる。規模は確認できる範囲で、東西2.9m、南北2.83m、壁高は東壁34cm、北壁20cmを測り、やや角度を持って立ち上がる。柱穴は確認されなかった。カマドは北壁の中央やや東よりに設けられていると考えられ、袖幅1m、奥行き74cmを測る。

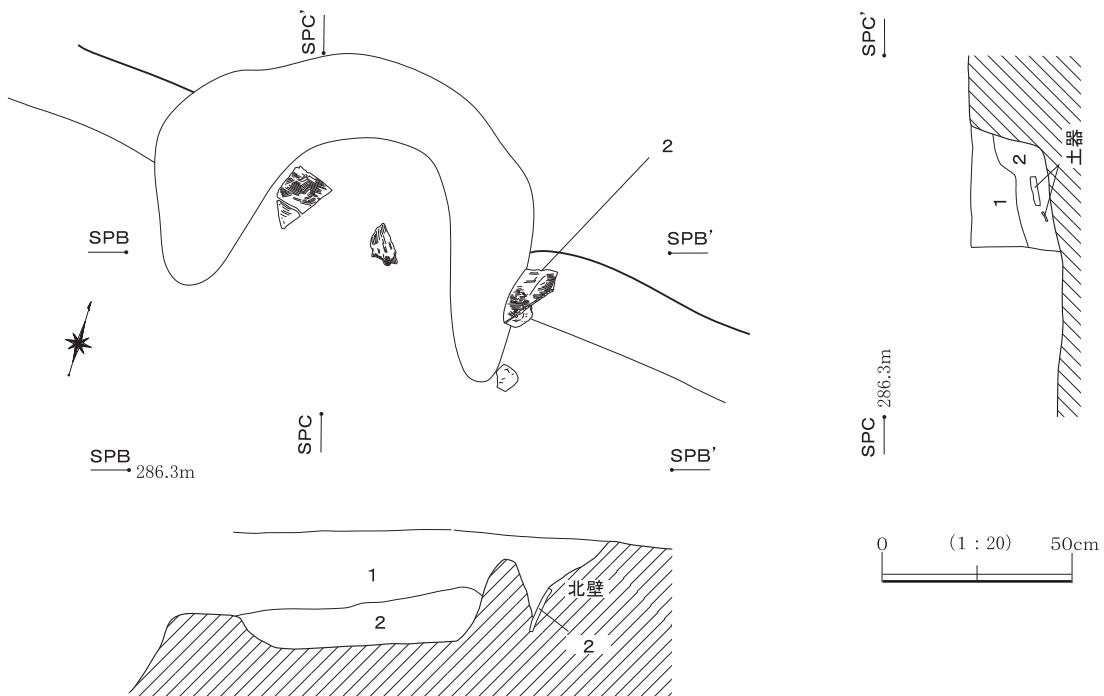
建物内は昭和期の攪乱を受けており、遺物は殆ど出土しなかったが、カマド内及びカマド東袖に須恵器甕片が検出されている。時期は須恵器やカマドの位置、他の建物遺構の南北中心軸の方向性から8世紀代と考えられる。



1、極暗赤褐色(5YR2/3) 粘性弱 しまり中 微砂粒を多く含む 1mm前後の白色粒子を全体に含む  
2mm前後の炭化物を全体に少量含む 西側に1cm前後の焼土の塊を含む



第11図 5号竪穴建物跡・出土遺物



- 1、極暗赤褐色(5YR2/3) 粘性弱 しまり中 微砂粒を多く含む 1mm前後の白色粒子を全体に含む  
 2、褐色(10YR4/4) 粘性中 しまり中 10cm前後の焼土塊を全体に含む 炭化物を少量含む

第12図 5号竪穴建物跡カマド

第4表 5号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	注記記号	器種	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	技法・器形の特徴
1	F17-5住床直P1	土師器	壺	残7.1	—	11.3	にぶい橙(5YR6/4)	キメやや粗い 金雲母・白色粒子を含む	良	内面横方向のハケ目 底部も木葉痕あり
2	F17-5住カマド右ソテ一括	須恵器	壺	—	—	—	橙(5YR7/8)	緻密 長石・赤色粒子を含む	良	外面並行タタキ目

### 3. 土坑

今次調査では、調査区中央付近で5基の土坑が発見された。

#### 1号土坑（第13図、写真図版1）

調査区中央北側に位置し、規模は東西96cm、南北70cm、深さ36cmの橿円形を呈す。

#### 2号土坑（第13図、写真図版2）

調査区中央やや西側に位置し、埋設炉、1号竪穴建物跡を切る重複関係にある。規模は東西1.12m、南北1.06m、深さ16cmの円形を呈す。図化できる遺物は無かつたが削りのあるキメ細かな土師器小片や1号竪穴建物跡を切っていることから時期は平安時代前期から中期と考えられる。

#### 3号土坑（第13図、第5表、写真図版2・4）

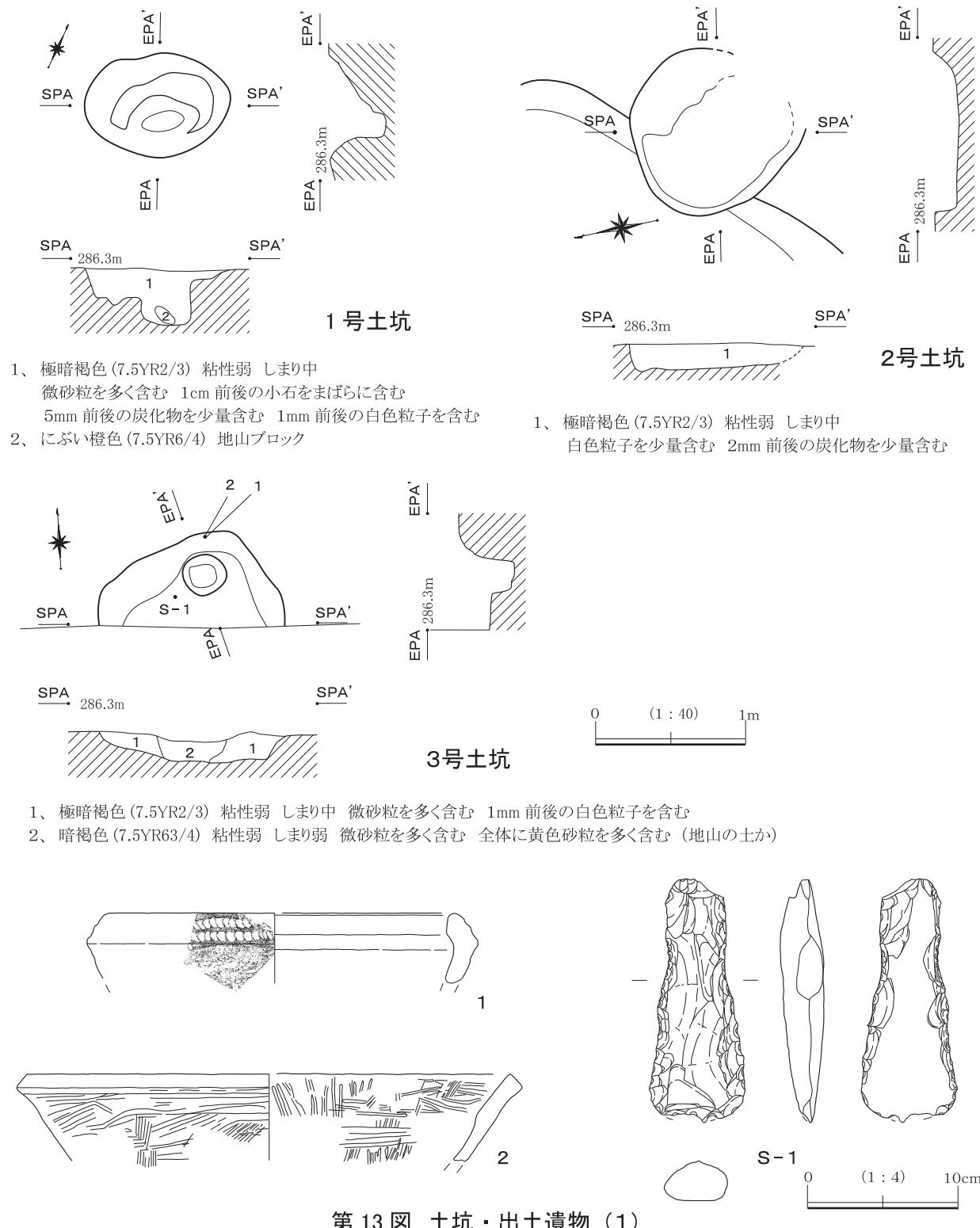
調査区西側に位置し、遺構南側は調査区外となる。規模は東西1.13m、南北は確認できる範囲で70cm、深さ17cmの隅丸方形を呈すと考えられる。また土坑内に径14cmの円形ピットが確認された。遺物は覆土上層で井戸尻1式期の深鉢片がまとまって出土し、中層より口辺部押し引文を施す縄文浅鉢小片や打製石斧が出土していることから縄文時代中期井戸尻1式期と考えられる。

#### 4号土坑（第14図、第6表、写真図版2・4）

調査区中央北側に位置し、南側が2号竪穴建物跡に切られている。規模は東西97cm、南北は確認できる範囲で90cm、深さ22cmを測る。形状は南北に長軸を持つ楕円形と考えられる。遺物は覆土中から打製石斧が出土しており、時期は縄文期と考えられる。

#### 5号土坑（第14図、第7表、写真図版2）

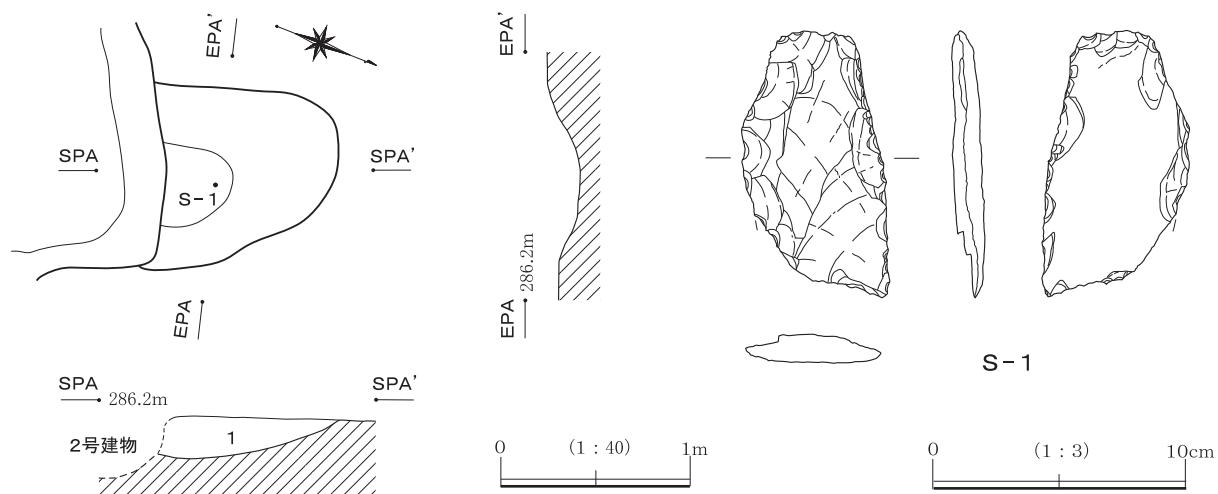
調査区中央北側に位置し、規模は東西54cm、南北80cm、深さ20cmを測る。形状は南北に長軸を持つ楕円形で、覆土中から浅鉢小片が出土している。時期は縄文期と考えられる。



第13図 土坑・出土遺物(1)

第5表 3号土坑出土遺物観察表

番号	注記記号	器種	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	技法・器形の特徴
1	F17-3土P1直下	縄文土器	浅鉢	残4.7	(24.0)	—	橙(5YR6/6)	キメやや粗い白色粒子・金雲母	良好	外面口縁部押し引文
2	F17-3土P1 F17-3土1層一括 F17-シツ1トレ一括	縄文土器	浅鉢	残5.8	(32.2)	—	にぶい黄褐(10YR5/4)	キメ細かく緻密金雲母・赤色粒子	良好	外面縦・斜め方向ミガキ 内面縦・横方向ミガキ
3	F17-3土P1	縄文土器	深鉢	—	(24.0)	(10.8)	にぶい赤褐(5YR5/4)	キメやや粗い白色粒子を多く含む	良	
S-1	F17-3土S2	石製品	打製石斧	最大長16.0	最大幅6.3	最大厚2.65	—	—	—	

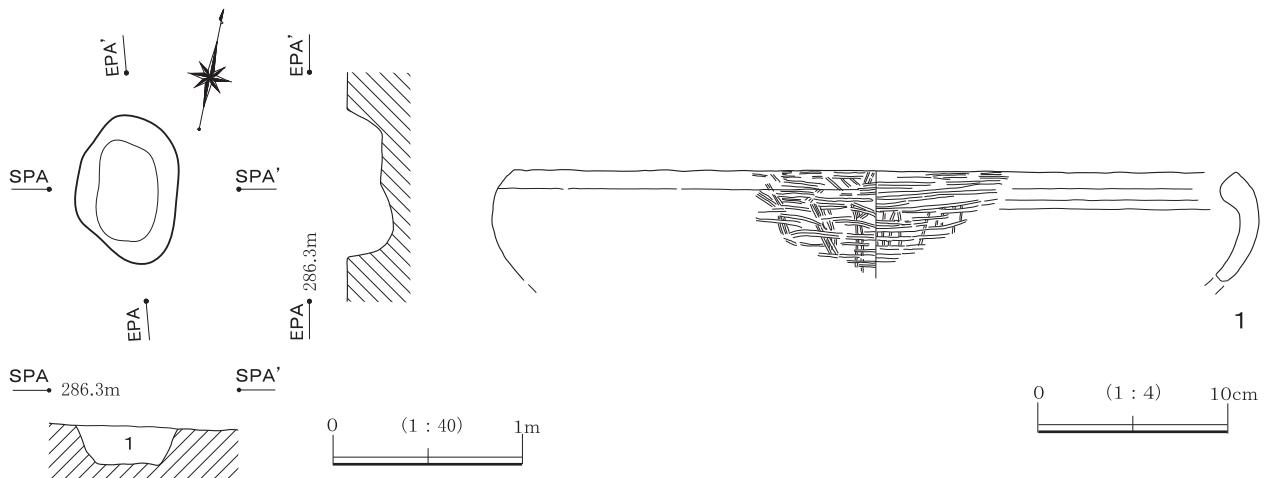


1、極暗褐色(7.5YR2/3) 粘性中 しまり中  
10 ~ 30mm の黄色ブロック塊を全体に含む  
微砂粒を多く含む

4号土坑

第6表 4号土坑出土遺物観察表

番号	注記記号	器種	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	技法・器形の特徴
S-1	F17-4土S1	石製品	打製石斧	最大長10.6	最大幅5.6	最大厚1.15	—	—	—	



1、黒褐色(10YR2/3) 粘性中 しまり中 微砂粒含む

5号土坑

第7表 5号土坑出土遺物観察表

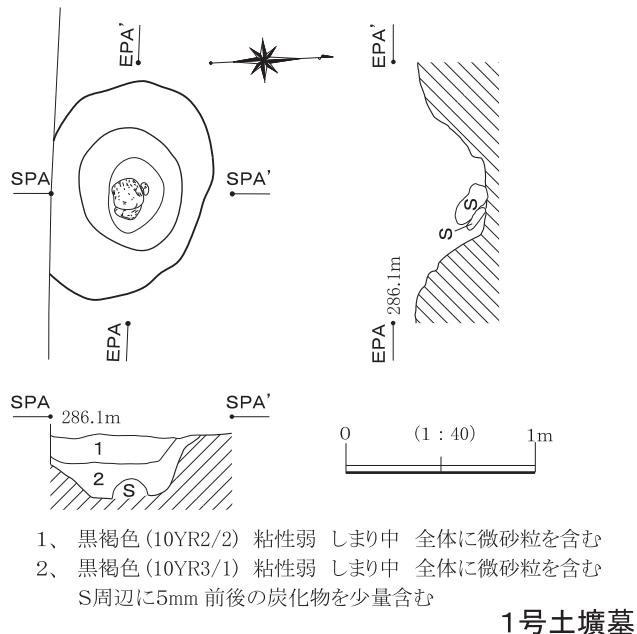
番号	注記記号	器種	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	技法・器形の特徴
1	F17-5土一括	縄文土器	浅鉢	残5.7	(38.2)	—	橙(5YR6/6)	キメ細かく緻密白色粒子・金雲母	良好	内外面・縦横方向ミガキ

第14図 土坑・出土遺物(2)

#### 4. 土壙墓

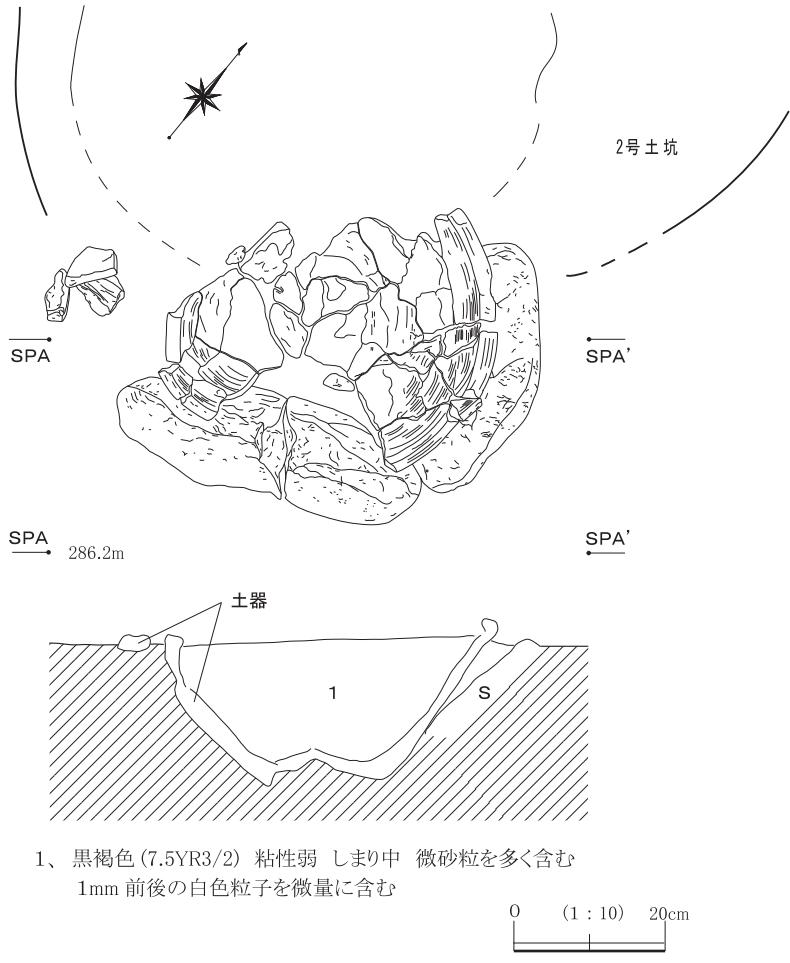
##### 1号土壙墓（第15図、写真図版2）

調査区中央南側に位置し、規模は東西1.2m、南北85cm、深さ34cmを測る。形状は東西に長軸を持つ橢円形で4号竪穴建物跡を掘り込んでいる。遺構底部に15cm前後の不整形な礫が重なるように出土しており、その周辺から炭化物が少量確認されている。堆積土含有物から堆積時間は建物跡と時間差があると考えられる。また不整形な礫の複数堆積や形状、これまでの周辺遺跡調査結果などから墓跡と推定される。

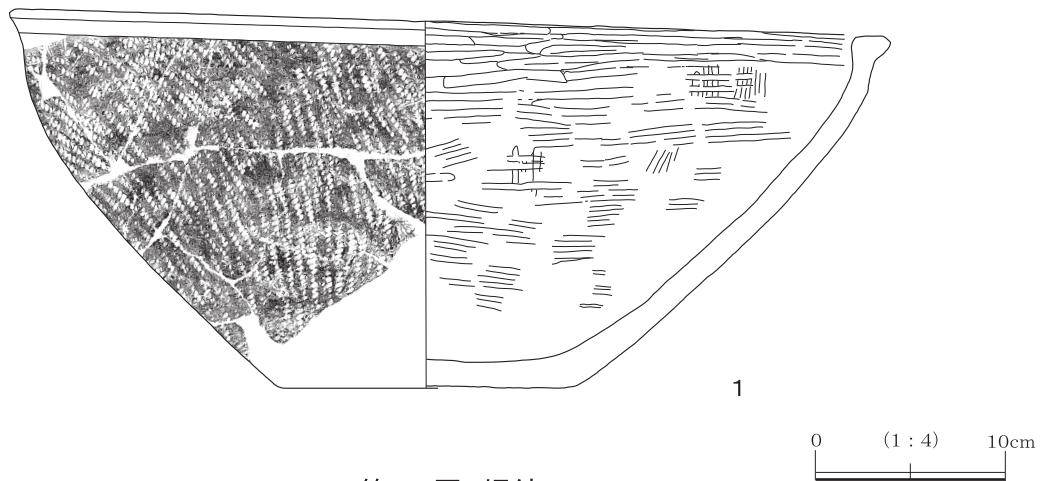


##### 5. 石囲い埋設土器炉（第15・16図、第8表、写真図版2・4）

調査区中央やや西側に位置し、北、東側の約半分は2号土坑に切られ南側は2号竪穴建物跡の北壁と接している。長軸約40cm前後の長方形礫が東側と南側に囲われてるが北側、西側は確認されなかった。これは2号土坑の構築によって礫が外されたことによるものと考えられる。遺物は外面に縄文が施された浅鉢1点が埋設された状態で出土している。本遺物も1/3ほどが欠損しており、2号土坑構築の影響と考えられる。炉直径は石面で東西約45cm、掘方で50cm、深さ約19cmを測り、形状は長方形と推察される。炉内や浅鉢覆土には灰や焼土は確認されなかった。時期は縄文時代中期井戸尻式期。



第15図 1号土壙墓・石囲い埋設土器炉



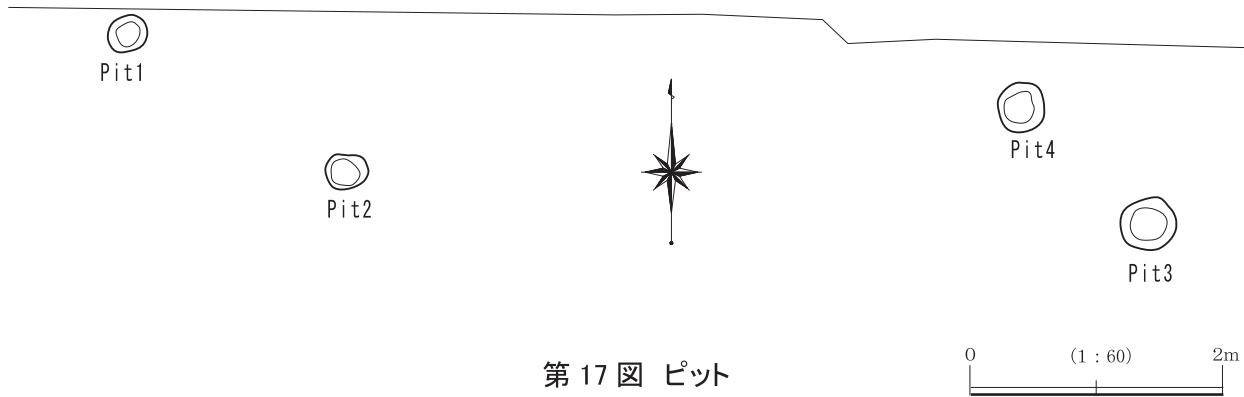
第 16 図 埋鉢

第8表 石囲い埋設炉出土遺物観察表

番号	注記記号	器種	器形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	焼成	技法・器形の特徴
1	F17-アサハチ	縄文土器	浅鉢	20.1	45.2	15.0	明赤褐 (2.5YR5/6)	緻密 細かい砂を多く含む	良好	外面縄文 口縁～肩部にかけてナデ？ミガキ？

## 6. ピット (第 17 図)

調査区中央から東よりにかけての北側に 4 か所発見された。径 50cm 前後、深さ 20cm 前後の円形ピットで、建物柱間線は確認できなかった。



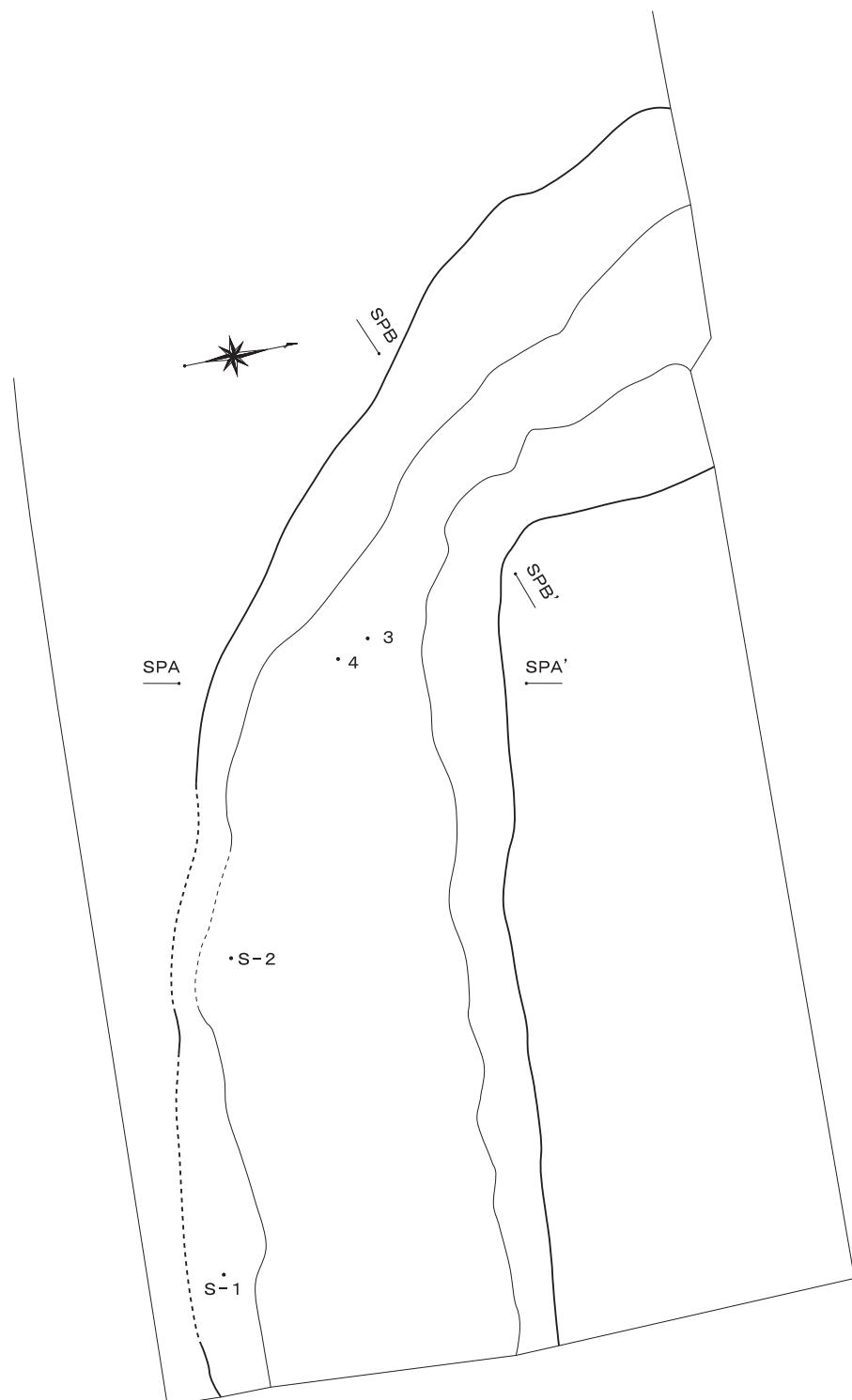
第 17 図 ピット

## 7. 溝跡

### 1 号溝跡 (第 18・19・20 図、第 9 表、写真図版 3・5)

調査区東側に位置し、調査区北壁から南下し東に方向を変え調査区東壁に至る。調査区南側の東西方向南面立ち上がり部分は比較的新しい擾乱によって部分的に壊されている。規模は調査区北壁付近の溝幅 2.55m、SPB-SPB' 間の幅 1.46m、深さ 37cm、SPA-SPA' 間の幅 2.26m、深さ 38cm を測り、溝形状は SPA-SPA' が U 字型、SPB-SPB' が V 字型を呈す。

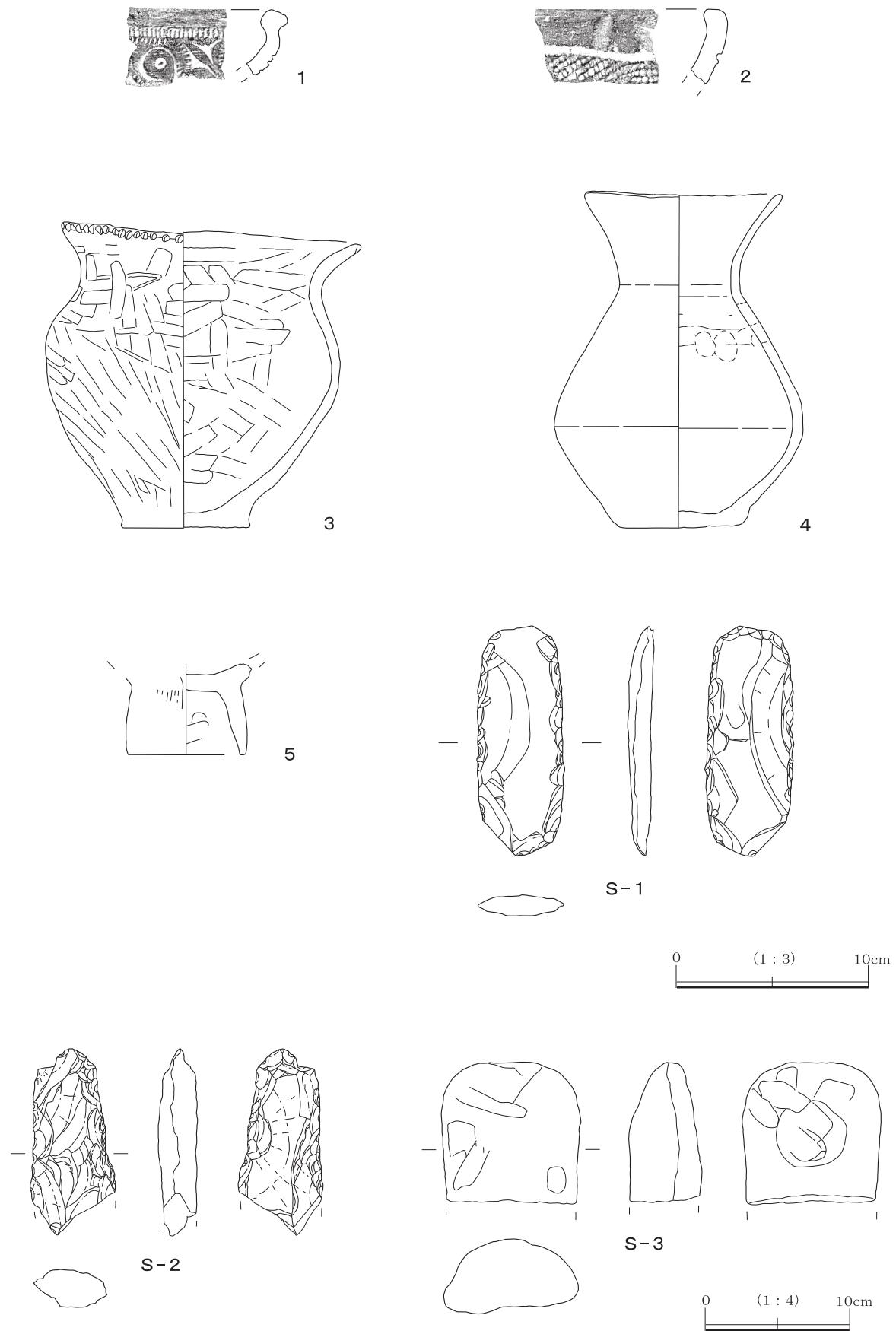
遺物は 1 層、2 層から縄文、土師器小片が満遍なく出土している。1 は縄文中期中葉の藤内、2 は中期中葉の曾利式期、3、4 は弥生時代末期と考えられ、3 は 2 層上面、4 は 2 層下方から出土している。



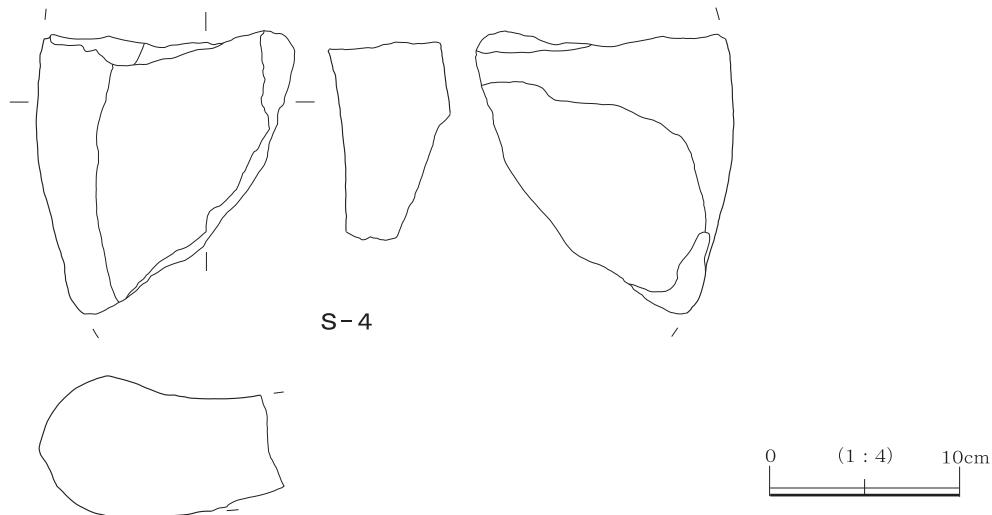
1、 黒色 (7.5YR1.7/1) 粘性弱 しまり中 微砂粒を多く含む 雲母を多く含む  
 2、 極暗褐色 (7.5YR2/3) 粘性弱 しまり中 微砂粒を多く含む

0 (1 : 50) 1m

第 18 図 1号溝跡



第19図 1号溝跡出土遺物 (1)



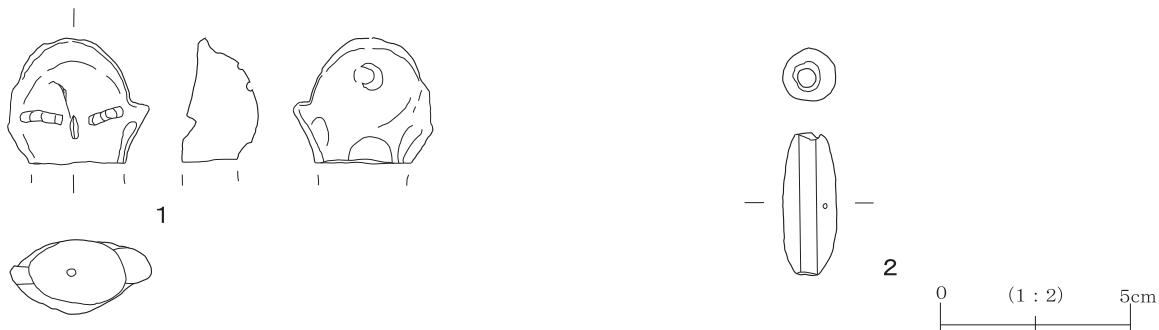
第20図 1号溝跡出土遺物 (2)

第9表 1号溝跡出土遺物観察表

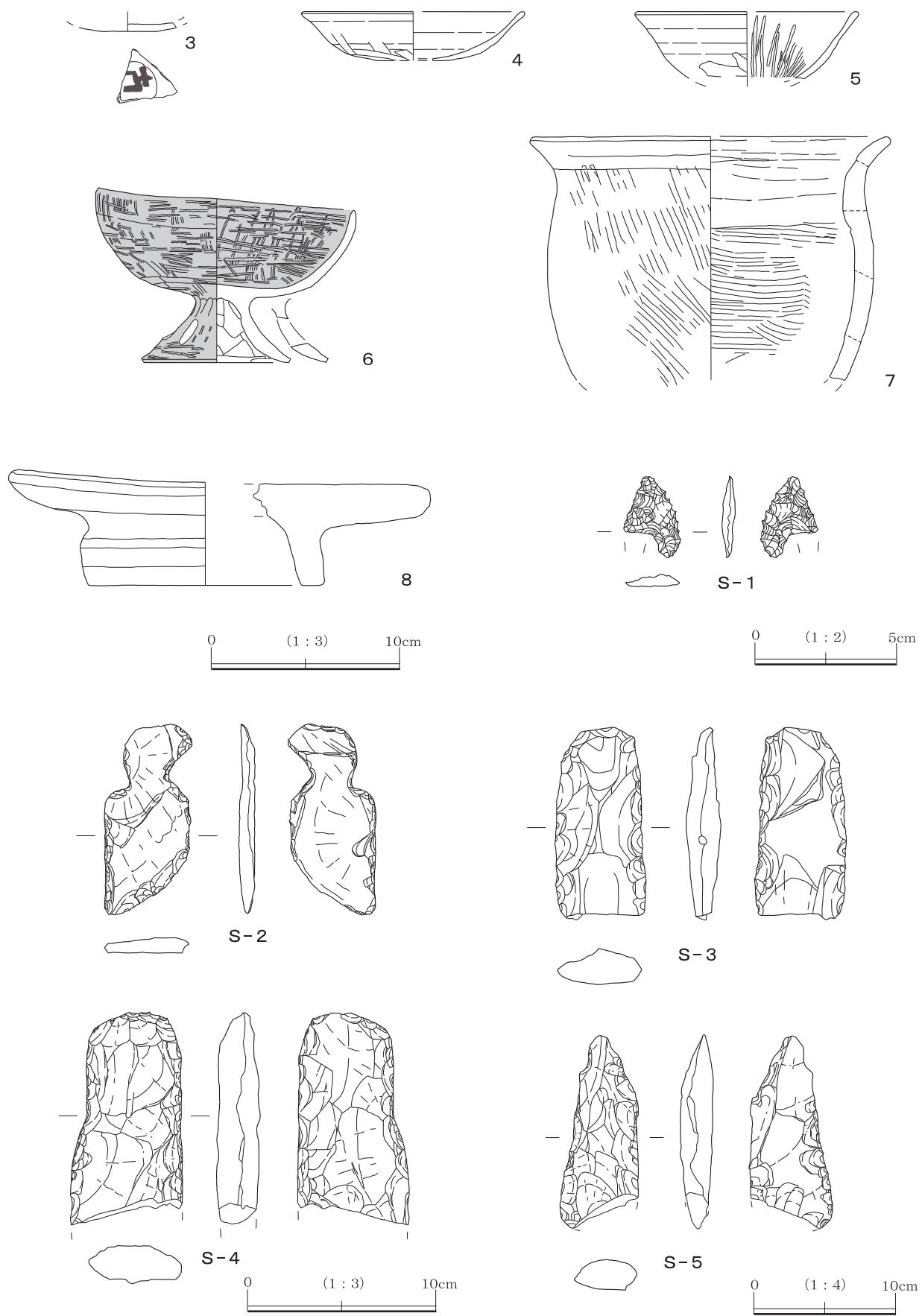
番号	注記記号	器種	器形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	焼成	技法・器形の特徴
1	F17-1ミゾ'1層一括	縄文土器	深鉢	残3.5	—	—	にぶい橙 (7.5YR6/4)	長石・金雲母を含む	良好	内面横方向ナデ
2	F17-1ミゾ'2層一括	縄文土器	深鉢	残3.9	—	—	にぶい橙 (7.5YR6/4)	長石・雲母・赤色粒子をまばらに含む	良好	外表面に糸文 外表面口辺部横方向ミガキ
3	F17-1ミゾ'P1	土師器	壺	16.0	15.4	6.7	明赤褐 (2.5YR6/6)	緻密 白色粒子を多量に含む	良好	口唇部にキザミあり 外表面指ナデ・ヘラナデ 内面ヘラナデ 左右のゆがみ大
4	F17-1ミゾ'P2 F17-1ミゾ'1層一括	土師器	壺	17.6	10.1	6.7	橙 (5YR6/6)	キメ粗い 金雲母多量・赤色粒子・ 微砂粒を多く含む	良好	赤色塗彩を施す 内面体部指頭痕
5	F17-1ミゾ'1層一括	土師器	台付壺の台部	残3.2	—	(4.1)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	長石をまばらに含む	良好	
S-1	F17-1ミゾ'S2	石製品	打製石斧	最大長 11.9	最大幅 4.5	最大厚 1.1	—	—	—	
S-2	F17-1ミゾ'S1	石製品	打製石斧	最大長 11.7	最大幅 5.9	最大厚 2.7	—	—	—	
S-3	F17-1ミゾ'一括	—	—	最大長 9.7	最大幅 9.6	最大厚 4.7	—	—	—	
S-4	F17-1ミゾ'一括	石製品	石皿	最大長 14.6	最大幅 13.5	最大厚 7.6	—	—	—	

## 8. 遺構外出土遺物 (第21・22・23図、第10表、写真図版5)

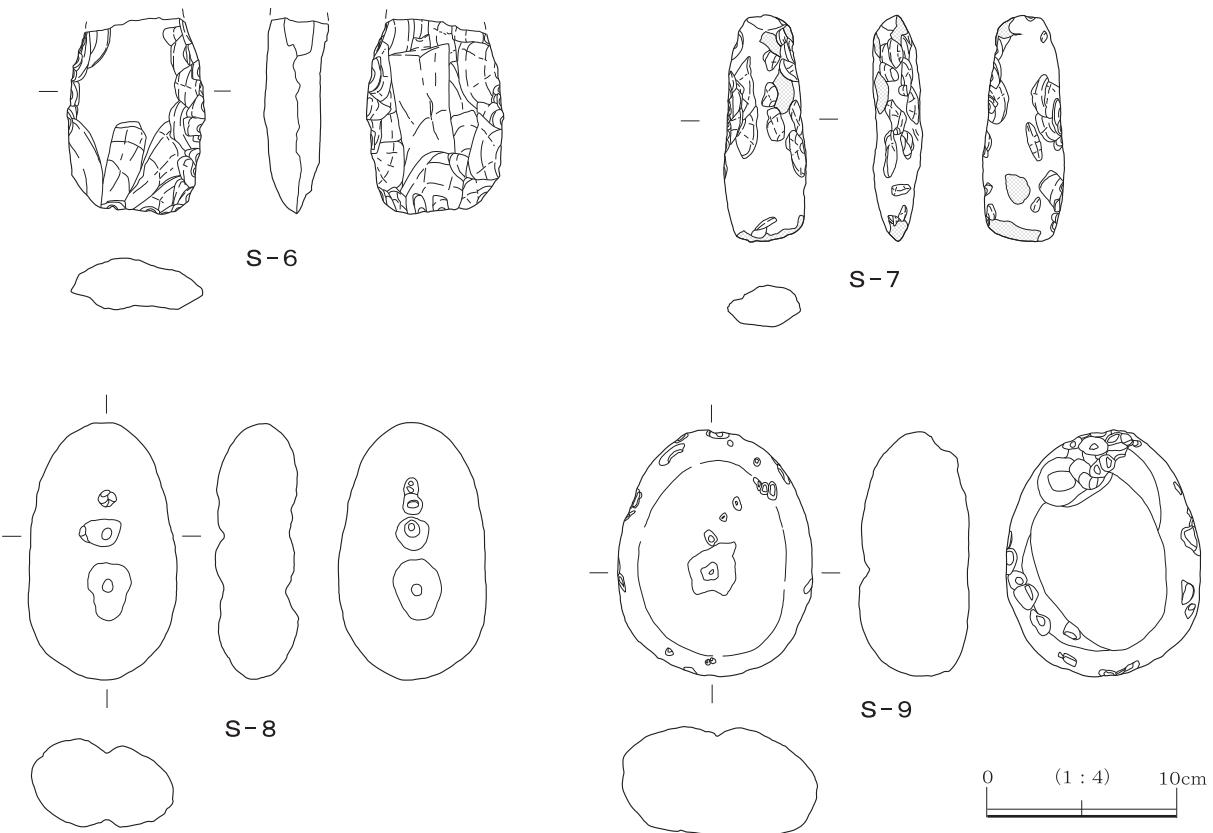
調査区全体の遺構確認面上で縄文土器片や土師器片、石斧などが出土している。第21図1の土偶頭部は2号竪穴建物跡西壁の西側外付近の遺構確認面上で試掘調査時に出土している。顔面モチーフなどから曾利式期と考えられる。また、首割れ口には径2mmの木芯痕と考えられる孔があり、手捏ね法や塑像法といった製作技法上残された孔と考えられる。第22図8の器台は5号竪穴建物跡北側、同建物跡カマド右袖付近、3号竪穴建物跡覆土1層上面の3か所から出土したものが接合されている。打製石斧は調査区中央付近を中心に出土している。



第21図 遺構外出土遺物 (1)



第22図 遺構外出土遺物 (2)



第23図 遺構外出土遺物（3）

第10表 遺構外出土遺物観察表

番号	注記記号	器種	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	技法・器形の特徴
1	F17-シツ1トレー括	—	土偶	残3.3	—	—	明赤褐(5YR5/6)	白色粒子を多量に含む	良好	目は押し引による表現
2		土製品	土錐	長径3.8	短径1.4	厚さ1.4	黒褐(10YR3/2)	キメ細かい	良	
3	F17-西2層一括	土師器	皿or壊の底部破片	残0.45	—	(3.1)	明褐(7.5YR5/6)	キメ細かく緻密	良好	外面底部墨書「」あり
4	F17-シツ2トレー括	土師器	皿	2.6	(12.0)	(4.0)	橙(5YR6/6)	キメ細かく緻密 赤色粒子・金雲母微量	良好	体部下半横方向のヘラ削り 底部ヘラ調整
5	F17-シツ2トレー括	土師器	壊	残3.6	(11.6)	—	橙(5YR6/6)	キメ細かく緻密	良好	外面体部下半斜め方向のヘラ削り 内外面口辺部横ナデ 内面放射状暗文
6	F17-シツP1	土師器	高壊	9.3	13.7	7.7	明赤褐(2.5YR5/8)	緻密 赤色粒子を含む	良好	
7	F17-シツ1トレー括	土師器	壺	残13.0	(18.8)	—	にぶい赤褐(5YR5/4)	キメやや粗い 金雲母・白色粒子・石英	良好	外面体部斜め方向ハケ目 内面横方向ハケ目
8	F17-台1 F17-3住1層一括 F17-5住かまく右げ一括	縄文土器	器台	6.2	22.0	12.6	にぶい橙(7.5YR6/4)	キメ粗い 金雲母・白色粒子	良好	台上部部分的に横方向ナデ 台上面に摩耗痕が一周する 脚底面摩耗痕
S-1	F17-中央区一括	石器	石鎚	最大長2.9	最大幅2.0	最大厚0.4	—	—	—	
S-2	F17-中央一括	石器	石匙	最大長12.5	最大幅4.7	最大厚0.8	—	—	—	
S-3	F17-中央2層一括	石製品	打製石斧	最大長10.1	最大幅4.8	最大厚1.9	—	—	—	
S-4	F17-西2層一括	石製品	打製石斧	最大長10.6	最大幅6.0	最大厚2.1	—	—	—	
S-5	F17-東一括	石製品	打製石斧	最大長13.0	最大幅5.5	最大厚2.1	—	—	—	
S-6	F17-シツ1トレー括	石製品	打製石斧	最大長10.3	最大幅7.3	最大厚2.7	—	—	—	
S-7	F17-シツ1トレー括	石製品	局部磨製石斧	最大長12.0	最大幅4.3	最大厚2.2	—	—	—	
S-8	F17-2層一括	石製品	叩き石？	最大長13.6	最大幅7.5	最大厚4.6	—	—	—	
S-9	F17-5住S1	石器	すり石・叩き石	最大長14.6	最大幅13.5	最大厚7.6	—	—	—	

## 第3章　まとめ

今次調査は分譲予定地内の市道認定計画地部分の120m<sup>2</sup>という狭小な面積の調査であったが、堅穴建物跡5軒、土坑5基、土壙墓1基、溝跡1条というまとまった数の遺構が発見された。しかし、幅員6mという道路予定地の調査であったため、規模など全容が明らかとなった遺構は僅少であった。

堅穴建物跡5軒の時期は6世紀第4四半期2軒、7世紀末から8世紀前半1軒、6世紀末から8世紀前半1軒、8世紀代1軒である。

今次調査結果により松ノ尾遺跡からこれまでに発見された堅穴建物跡は、140軒を超える何世紀にも亘り継続的に集落が営まれていたことがあらためて確認された。

松ノ尾遺跡の集落の画期は6世紀末から7世紀にかけてと10世紀後半から12世紀にかけての二時期が明らかとなっているが、今次調査の建物跡の年代は6世紀末から8世紀代という古墳時代末から律令制移行期、奈良時代のものが占め、新たな資料を提示することとなった。

今次調査の特徴として使用時代遺構に伴わない打製石斧、縄文土器片の出土数の多さが挙げられる。特に石囲い土器埋設炉周辺から打製石斧、縄文土器深鉢、器台など井戸尻1式期の遺物が集中して出土し、また藤内4式期の土器片も1号溝跡やその周辺から多数確認されている。本調査区北東約30mの第3次調査地点からは藤内4式期の堅穴建物跡が出土しており、今次調査区周辺には縄文時代中期中葉の集落が存在していたことが確実となった。

埋設土器炉周辺には同時期の土坑やピットが確認されていることから堅穴建物跡である可能性が高いが、炉自体が平安期の土坑によって切られ、周辺には1号、2号堅穴建物跡、1号溝跡が築かれ、さらに現代の攪乱が入り調査区も狭小であることから明瞭な壁の立ち上がりなどは確認できなかった。また、埋設された浅鉢の外面は火をうけておらず、灰や焼土も確認できなかったことから浅鉢が実際に炉に伴うものなのか、或いは廃絶に伴う行為によって埋設されたものかは検討が必要である。

土偶は2号堅穴建物跡西壁立ち上がりの外側で試掘調査時に出土している。時期は顔面のモチーフなどから曾利V式期と考えられ、周辺に中期後葉の集落の存在が考えられる。

1号溝跡とした調査区東端の遺構からは、覆土2層上面、2層覆土中から弥生時代末期の刻み口縁を持つ甕と無文の壺が南北から東西に軸線を変えた部分で出土している。

本溝跡北面側上場線を観察すると、南北方向から東西方向にほぼ直角に屈曲していることが看取できる。直角に屈曲する溝状遺構は流路など一般的な溝の用途としては考え難く、遺物の出土状況や屈曲状況、溝跡北面立ち上がりから調査区壁までの確認面形状などを総合的に観察すると方形周溝墓の可能性が高いと考えられる。

松ノ尾遺跡では本調査区北方約400mの第15次調査地点で古墳時代初頭の方形周溝墓6基が調査されている。また本調査区南方約200mの末法遺跡3次調査地点では古墳時代初頭の方形周溝墓1基が発見されており、本遺構を周溝墓とした場合、東側微高地上に営まれた末法遺跡から松ノ尾遺跡の広範囲にかけて3世紀から4世紀の墓域、居住域を持った大集落が存在していた可能性が高くなつた。

今次調査は調査区面積が狭小ではあったが比較的密度の濃い状態で遺構が確認された。

松ノ尾遺跡は今次調査で17次を数え遺跡の性格もある程度明らかとなってきている。今後は縄文集落の解明や遺跡南側に広がる末法遺跡との関連性、6世紀から7世紀にかけて築造された周辺の千塚、赤坂台古墳群との関係性、古代末に立荘された志麻荘の拠点施設の解明など各時期を通じて本遺跡の位置付けを明らかにしていくことにより、遺構、遺物の調査視点、検討も一層詳細に対応できるものと思われる。

## 参考文献

- 『山梨県史 資料編2 原始・古代2』 1999 山梨県  
大鳩正之・小坂隆司 2004 『松ノ尾遺跡III』 敷島町教育委員会  
三輪孝幸・大鳩正之・小坂隆司 2004 『末法遺跡III』 敷島町教育委員会  
大鳩正之 2013 『御岳田遺跡V』 甲斐市教育委員会  
長谷川哲也 2016 『松ノ尾遺跡15』 甲斐市教育委員会  
大鳩正之 2016 「松尾社領甲斐国志麻荘域における古代集落遺跡の実態」  
『山梨県考古学協会誌』第24号 山梨県考古学協会

## 写 真 図 版



調査区全景



写真図版 1



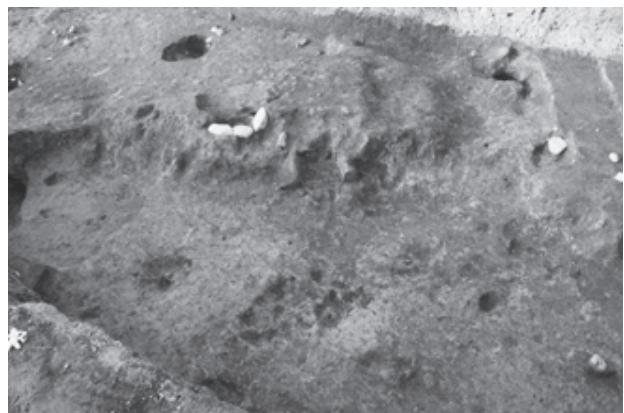
調査前風景（東から）



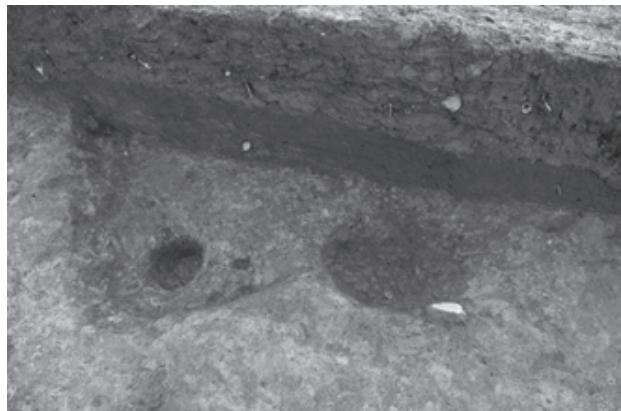
調査区表土掘削風景



1号豎穴建物跡（南から）



2号豎穴建物跡（南から）



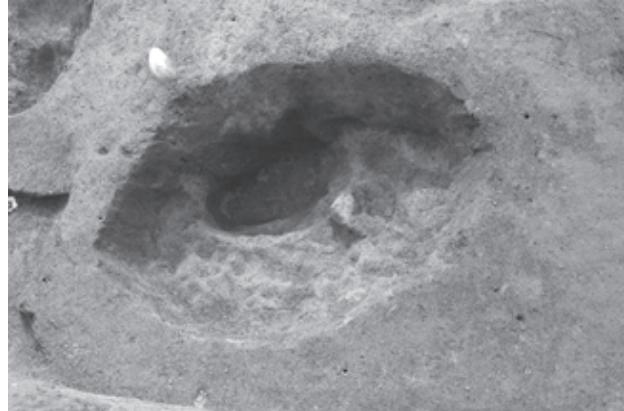
3号豎穴建物跡（北から）



4号豎穴建物跡（西から）



5号豎穴建物跡（南から）



1号土坑（北から）

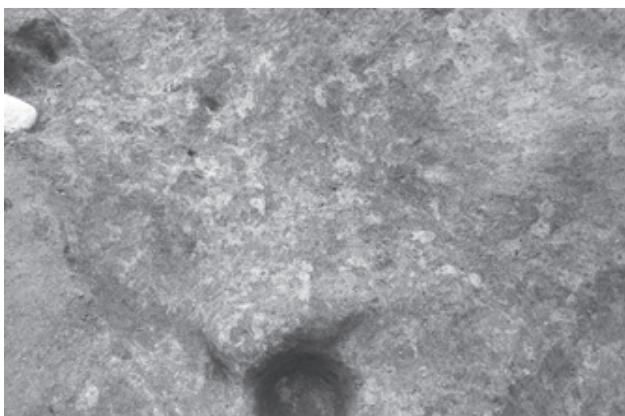
写真図版2



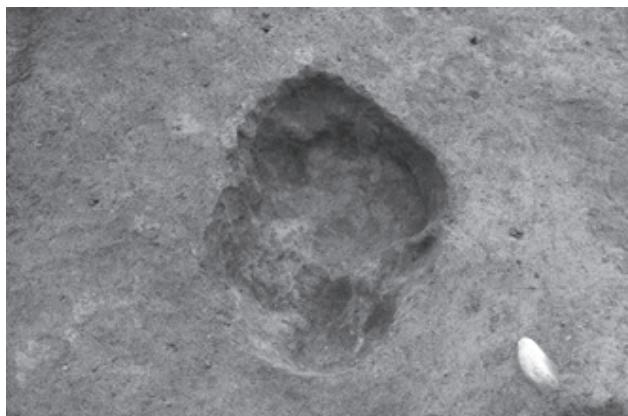
2号土坑（北から）



3号土坑（西から）



4号土坑（北から）



5号土坑（北から）



1号土壙墓（北から）



石囲い埋設土器炉（北から）



石囲い埋設土器炉（北から）



石囲い埋設土器炉完掘状況（北から）

写真図版3



1号溝跡（東から）



1号溝跡（南から）

写真図版 4



1号竪穴建物跡 2



1号竪穴建物跡 5



1号竪穴建物跡 S-1



1号竪穴建物跡 6



1号竪穴建物跡 10



1号竪穴建物跡 11



3号竪穴建物跡 1



3号竪穴建物跡 S-1



3号土坑 3



3号土坑 3



3号土坑 S-1



4号土坑 S-1



石匂い埋設炉 1

写真図版5



1号溝跡 3



1号溝跡 4



1号溝跡 S-1



1号溝跡 S-2



1



2



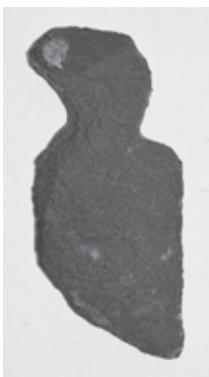
6



8



8



S-2



S-3



S-4



S-5



S-6



S-1



S-7

遺構外出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	まつのおいせき							
書名	松ノ尾遺跡17							
副書名	民間宅地造成工事に伴う縄文・弥生・古墳・奈良時代の発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	甲斐市文化財調査報告書							
シリーズ番号	31							
編著者名	大島正之							
編集機関	甲斐市教育委員会							
所在地	〒400-0192 山梨県甲斐市篠原2610							
発行年月日	令和2年[西暦2020年]3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
まつのおいせき 松ノ尾遺跡(17)	山梨県甲斐市 大下条地内	19210	敷-18	35度40分 26秒	138度31分 41秒	平成30年 11月8日 ～ 平成30年 12月25日	120m <sup>2</sup>	県道改良 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
松ノ尾遺跡	集落跡	縄文 弥生 古墳 奈良	竪穴建物跡 土坑 溝跡	縄文土器 弥生土器 土師器 石器	縄文時代中期石囲い土器埋設炉、土偶頭部の出土。 周溝墓の可能性が高い溝跡の出土。			

### 甲斐市文化財調査報告 第31集

## 松ノ尾遺跡17

発行日 令和2年(2020)3月31日

発行 甲斐市教育委員会

山梨県甲斐市篠原2610

TEL(055)278-1697

印刷 山梨県甲府市丸の内1-10-1

株式会社 峠南堂印刷所



